
Yeshua (Jesus・Christについて)

青山曜三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y e s h u a (J e s u s ・ C h r i s t について)

【Nコード】

N 6 5 0 9 L

【作者名】

青山曜三

【あらすじ】

「ナザレのイエス」について書いたものです。最終的には「キリスト」であることを証明する予定ですが、一度では無理なので序説的な意味で書くことにしました。よく「ナザレのイエス」のことは出し尽くされたという話を聞きますが、私はそう思っておりません。それどころか何も知らないのに等しいのが現状だと思っています。自分の考えがすべて正しいというつもりはありませんが、大筋の「キリストは十字架に磔にされて処刑された」、「ユダがキリストを裏切った」、「十二使徒はキリストを見捨てて逃げ去った」といっ

た解釈は明らかに誤読です。根拠は本文に記してあるので省きますが、この手の根本的な誤りを正さないといつまでたってもイエスの影を引き摺ることになると思います。本稿は七週に渡って一週間毎に連載してゆく予定であります。キツイ主題なのでこれまた一度にというわけには行かないからです。これをどのようなジャンルと受け取るかは読者の自由です。イエスに関心のある方の「プラス」になれば幸いです。

プロローグ

イエスの謎を解くカギは弁証法が握っている。

・イエスは予言されたキリストだった

このキリスト教の言明をテーゼとし、

・イエスはキリストだったわけではない

このイスラム教的な言明をアンチテーゼとして、

この二つのテーゼを総合すればひとつの止揚に至るからである。

このように定式化すると論争の焰^ひも消えることになる。不完全であっても互いの正当性を認めれば条件は同じである。このようにこの試みは大人の対話を可能にする意味でも意義のある取り組みといえる。

ではジンテーゼはどのようになるのだろうか。私の止揚は次のとおりである。

・イエスは予言されたキリストではなかった、ゆえに、わたしたちのキリストだった

これが本来の在るべき姿ではなからうか。

ここで問題となるのがキリストの解釈の問題である。キリスト（メシア）の起源であるイスラエル民族は、よく知られているように、キリストは「ダビデの家系から生まれ、イスラエルの再興を果たし、世界に平和をもたらす者」と解釈している。この他にもモーセの如

き指導者とか「人の子」といった解釈もあるが、話が込み入るので省くことにする。キリスト教は「ナザレのイエス」をキリストと信じ、三位一体の一位格にキリストを仰ぐ世界最大の宗教である。キリスト教はこの信仰を基にイエスを神格化した独自の神学を唱えている。有名な三位一体論はアウグスティヌスの譬えが好例である。愛は「『愛するもの』と、『愛されるもの』と、『愛そのもの』によって成り立つ」という。つまりこれが愛の実在と捉える立場から以上の三つの要因を一様化して「愛」とするのである。この例が分かれれば「父なる神、子なる神、精霊なる神」の意味もつかめると思う。以上がキリスト教のキリスト像である。アンチ・キリストのキリスト像は多種多様で理解し難いもの解釈もあるが、蓋然的に総合すると「救世主（神の子）」に帰納するのではなからうか。

いずれにせよジンテーゼとなるキリストはあらゆるキリスト観を満たすキリストでなければならぬだろう（真理）。万人が納得し、万人を救えるキリストでなければキリストとはいえない。ゆえに、ジンテーゼに「わたしたちの」という人称代名詞（一人称複数だと思ふ）が不可欠となるのである。以上が、本稿が提示する「ナザレのイエスⅡイエス・キリスト」である。

因みに現教皇ベネディクト16世が「ナザレのイエス」について書いている（『ナザレのイエス』／教皇ヨゼフ・ラツィンガー著／里美泰明訳／春秋社）。教皇はこの書の中で「史的イエス（人間イエス）」の批判的・歴史的研究の進捗について次のようにコメントしている。

・ところが五十年代に入ると状況が変わってきました。「歴史のイエス」と「信仰のキリスト」の間に裂け目が深まり、亀裂は日増しに増大してゆきました。人間イエスの姿が今まで私たちが信じてきたものとはまったく異なるものとなってしまおうとしたら、福音書が

示し、福音書に従って教会が教えるようなイエスの姿でなくなってしまうとしたら、キリスト・イエスに対する信仰、生ける神の子イエスに対する信仰はどうなってしまつのでしょうか。

・人間であり、私たちの友であるイエスに対する内的な信頼の念がすべてのよりどころであるというのに、そのよりどころが奪われようとしているのです。

目を疑うような悲愴的なコメントである。「キリストの代理人」を任ずる教皇のこの赤裸々な告白に教会の置かれている現状が切実に綴られている。

まずは「イエスの事件」の真相を明らかにしなければ話にならない。早速福音書の読解から始めることにする。

*タイトルの「Yeshua」はイエスのアラム語でイエーシューアと読む。

封印を解く

イエスのことは福音書に封印されているという説がある。伝説であるが、これが事実ならば事はいたって単純である。では如何にして解くのだろうか。以下がその解法である。

正典の四つの福音書を読むと、「これは預言者によって言われた言葉が成就するためである」という句が多く使われていることに気付く。もっとも多いのはマタイ伝でW・バークレーによると十六回も出てくるという(『マタイ福音書ノウイリアム・バークレー著ノ聖書註解シリーズ1ノヨルダン社』)。封印したのであれば「メッセーじ」を残しているにちがいない。さもないと無用の長物となる懼れがある。福音書の筋はこの句で構成されている。他にそれらしきものが見当たらないのであればこの句をメッセーじとみてよさそうである。この句は同時に「キーワード」の機能をもつにちがいない。「メッセーじ」キーワードでなければ意味を成さないからである。ではこのキーワードを使うと事態はどう変わるのだろうか。以下がその概要である。

このキーワードを使うと、

- ・ イエス(キリスト)は十字架に磔にされて処刑された
- ・ ユダがイエス(キリスト)を裏切った
- ・ 十二使徒はイエス(キリスト)を見捨てた

という従来の認識が機能しなくなる。

なぜなら、そう予言されていたからである。

つまり、キリストは、

・罪人として処刑されることになっていた（予言されていた）のであり

・裏切られることになっていた（予言されていた）のであり

・見捨てられることになっていた（予言されていた）

からである。

自らの意志で予言を成就させたのであれば「受動的」ということはありえない。だれの指示も受けずに行つたのであれば「受動的」ではなく「主導的」と採るのが合理である。従つてこの認識は次のように改められることになる。

・イエス（キリスト）は、処刑されたのではなく、（自分を）処刑させた

・イエスは（キリスト）ユダに、裏切られたのではなく、（自分を）裏切らせた

・イエス（キリスト）は十二使徒に見捨てられたのではなく、（自分を）見捨てさせた

これが正しい読解である。

つまり従来の認識は「事実」であっても「真実」ではないのである。文字では「〜された」と記してあつても「本」がそうなつていないからである。このことは次のように例えると分かり易くなるかもしれない。

たとえば、私があなたから「殴られる」という予言があつたとしよう。さらに私以外だれもこの予言を知らないと仮定する。私はこの予言を果たすべくあなたに姦計を謀る。嘘をつき、デマを流し、横柄な態度をとるなどしてあなたの理性を狂わせようと図る。あなた

は私を無視し、平静を装っているが私の度重なる嫌がらせによつてついに私を殴つてしまう。

さてこの場面を第三者が目撃していたとしたらどう映るのだろうか。当然あなたが私を「殴つた」と映るはずである。事情を知らなければ「殴つた」としか受け止めようがない。仮に口の軽い目撃者であればこの事実を瞬く間に広めるかもしれない。裁判を起こしても私が勝つのは必至である。事情が漏れないかぎり負けるはずがない。ところが「真実」の観点から見直すと、事態が一変する。私がこの事件の立案者であり、実行犯であることが明らかになるからである。その結果、あなたは私に利用された被害者となり、私は加害者となる。暴力を振るつた罪も問われることはないだろう。要するに私の自作自演の事件だったことが明らかとなり、私は受動的な立場の者から主導的な立場の者に転ずるのである。

この「事実」と「真実」の相関係の原理が「イエスの事件」でも働いている。先の予言を果たしたのであれば、イエスは処刑されたはずである。処刑されなければ果たしたことにならないのだから予言を成就させたのであれば「処刑された」にちがいない。事実、聖書外資料もそう伝えているし、これを打ち消す証拠も見つかっていない。しかしこれは「事実」であつて「真実」ではない。事情は先の例と同じである。捏造するのであれば文字化しなければ捏造のしようがない。だがこれをせず「予言」と「成就」の因果関係を巧みに使つて封印を施している。「文字は人を殺し、霊は人を生かす」（コリント人への第二の手紙3：6）の信仰が要因と思われる。「イエスの事件」は現実に起きた事件だったのである。よつて、十字架に磔にされた後も生きていてマグダラのマリアと結婚したとか、子供がいた等の俗論はフィクションと言わざるを得ない。

では如何にして先の予言を成就させたのだろうか。福音書はこの問題の真相も伝えている。まずは時間的順序に沿つて、「裏切られた」

、「見捨てられた」という予言から取り組むことにする。手引きとなる資料は次の二つのくだりである。

さてイエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、また、悪霊を追い出す権威を持たせるためである。マルコ3：13 - 15

有名な十二使徒の選定のくだりである。そして、

彼らはさんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつきまゆくであろう。』わたしは羊飼いを打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。するとペテロがイエスに答えて言った、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」。イエスは言われた、「よくあなたに言うておく。今夜、鶏が泣く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。ペテロは言った、「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」。弟子たちもみな同じように言った。マタイ26：30 - 37

これが逮捕される夜のオリブ山でのくだりである。

この二つのくだりの因果関係は明白である。イエスは「わたしは羊飼いを打つ。そして、羊の群れは散らされるだろう」という予言を成就させるために「みこころにかなった者（使徒）」を「みもと」に集めていたのである。「みこころにかなった者」とは「つまずく者」であり、「彼らを自分のそばに置くため」とは「散らす」ためであったことが分かるからである。事実、イエスが使徒を選んだの

である。そしてその選んだすべての使徒が「今夜つまりく」と言い、ペテロにいたっては酷な表現で言い切っている。だとすると、前に裏切る者だけ十二人集めていたとしか解釈のしようがない。「宣教をつかわす」、「悪霊を追い出す権威」といったことはエルサレム入城以前のことであって、イエスの「受難」はエルサレム入城後に起きている。そしてエルサレム入城後にこの思いを打ち明けているのであれば後者が本意ということになる。

これを裏付けるのが次のゲツサマネのくだりである。

そして、イエスがまだ話しておられるうちに、そこに、十二弟子のひとりのユダがきた。また祭司長、民の長老たちから送られてきた大ぜいの群集も、剣と棒とを持って彼についてきた。イエスを裏切った者が、あらかじめ彼らに、「わたしの接吻する者が、その人だ。その人をつかまえろ」と合図しておいた。彼はすぐにイエスに近寄り、「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻した。しかし、イエスは彼に言われた、「友よ、なんのためにきたのか」。このとき、人々が進み寄って、イエスに手をかけてつかまえた。すると、イエスと一緒にいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、そして大祭司の僕に切りかかって、その片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは彼に言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただけことができな」と、あなたは思うのか。しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」。そのとき、イエスは群集に言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣と棒を持ってわたしを捕まえにきたのか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、わたしをつかまはしなかった。しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである」。そのとき、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。

予言の成就のためと述べている。イエス自身の言葉として記されている以上これを疑ったのでは話にならない。「わたし」が神で、「羊飼い」がイエスで、「羊の群れ」が十二使徒であることは明白である。中には剣を抜いてイエスを守ろうとする健気な使徒もいた。だがイエスは戒めている。一緒に捕まったのでは「散らす」ことができない。イエスの言葉を借りれば預言者たちの言葉が成就できない。そこで「敵」が呆気に囚われるようなダニエル調の啖呵たんかをきることと逃げる隙を与えている。イエスのこのとつさの機知で予言が成就した経緯をこれらのくだりは伝えているのである。

さらなる証拠が次のくだりである。

イエスはこれらのことを語り終えて、弟子たちと一緒にケデロンの谷の向こうへ行かれた。そこには園があつて、イエスは弟子たちと一緒にその中にはいられた。

イエスを裏切つたユダは、その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがたびたびそこに集まつたことがあるからである。ヨハネ：
18：1 - 2

このくだりが「最後の晩餐」の後のくだりであることが重要である。イエスは聖餐の席でユダを追い払つた後、使徒たちとオリブ山へ行き（ここで先の「羊飼い」の予言を語る）、それから使徒たちをゲッセマネへ導いている。なぜ導いたのだろうか。ユダもよく知る場所だつたからである。つまりユダが現れるとふんで導いたのである。「最後の晩餐」を執り行つた「知人の家」では散らせなかつたからにちがいない。こう捉えなければゲッセマネでのイエスの言動と矛盾する。周到なイエスの計画が窺える。行き当たりばつたりの事件ではなかつたのである。

ここでユダについふれておく。

ユダこそ裏切りをもつとも期待されたメンバーだった。このことはユダが「イスカリオテのユダ」だったことから推測できる。「ナザレのイエス」同様「イスカリオテ」はユダの出身地、もしくは故郷を意味している。「イスカリオテ」はユダヤ地方に在った村か町だったといわれている。他のすべての使徒がイエスと同じガリラヤ地方の出身だったのに対しユダだけがユダヤ地方の出身者だったのである。このことからイエスの人選の意図が読める。ユダはこの一団の会計係だった。金目の事務を任せるなら収税人をしていただけでも務まる。だがイエスはユダを指名している。エルサレムの事情に通じる面を重視したからにちがいない。ユダはエルサレムに知人が居たはずである。ユダヤ当局とも無縁だったとは思えない。だからこそイエスを売ることができたのである。ガリラヤ出身の他の使徒ではユダのように迅速に事を運ぶことは困難である。素性の知れないガリラヤ人の話を鵜呑みにするほどユダヤ地方の人々はガリラヤ人のことを信用していなかったからである。ユダヤ地方の人々はガリラヤ人のことをアムハーレツ（地の民、律法を守らない田舎者）として軽蔑していた。

ユダは唯一の都会派のインテリだった。ユダのプライドが窺える。もとより田舎者のイエスと生死をとにもする男ではない。このプライドがイエスに運命を握られる不徳となった。ガリラヤ組より小知恵が利く長所が破滅への導火線となってしまうたのである。「最後の晩餐」が火薬だった。この席で慈悲にすがろうとするユダをイエスは超然と拒む。しかも裏切ることを知りながら止めずに裏切るよう促している（ヨハネ13：27）。「最後の晩餐」が神殿での事件の後で行われたことを見落としてはならない。使徒たちはイエスが起こした事件のために追い詰められていた。弱い人間性をえぐられる状況がイエスによって整えられていたのである。この抜き差し

ならぬ窮状でイエスは彼らにこう告げたのである、「あなたがたのうちひとり、わたしを裏切るうとして」(マタイ26:21)。名画以上の醜い騒ぎとなったことは想像するに難くない。裏切る資質をもつ者たちが危機的状況の中で心の急所を暴き立てられれば取り乱すのは目に見えている。この窮状から己を救えるのはユダしか居ない。かれはエルサレムに通じる唯一の身である。事実、イエスはユダを指名する。「あなただ」と(マタイ26:25)。裏切り者と決め付けてユダを追い詰めている。破門に等しい仕打ちである。イエスはユダの動揺などお構いなしにさらに為すべきことを為すよう促している(ヨハネ13:27)。もはやユダの居場所はない。イエスに義理立てする必要もなくなった。相手は犯罪者(不敬罪)である。密告(通報)は国民の義務でもある。ユダはこれをした。なにも知らずにイエスのシナリオ通りに動いたのである。この密告を、福音書は裏切りと説く。イエスの真意を知りながらユダにすべての罪を押し付けて「裏切り者」の汚名を着せている。なぜか。人間性に問題があったからにちがいない。ユダの醜い本性はイエスに接吻する醜悪な場面に表れている。このゲスな振る舞いが汚名を着せられる羽目になったのだと思う。事実、ユダは自分で墓穴を掘ったのである。イエスに促させる前から裏切る工作を行っていたと記されている(マルコ10:11)。イエスが用意した墓を自分で掘って飛び込んだのである。同情の余地があるはずがない。「臭いものには蓋をしろ」という金言がある。だが福音書は蓋をせず再利用したのである。ユダは「裏切り者の代名詞」として復活した。予期せず福音書の封印に貢献したのである。しかしながら以上の解釈は技巧上の方便であって真実ではない。物語(脚色)に過ぎないことは次の二つのくだりを読めば分かる。

わたしの信頼した親しい友、わたしのパンを食べた親しい友でさえも、わたしにそむいてくびすをあげた。詩篇42:9

わたしは彼らに向つて、「あなたがたがもし、よいと思うならば、わたしに賃金を払いなさい。もし、いけなければやめなさい」と言ったので、彼らはわたしの賃金として、銀三十シケルを量った。ゼカリヤ書 11:12

密告の報酬が同じ三十シケルであること、「信頼した親しい友」、「パン」、「そむいてくびすをかえす」の句を読めば説明は不要と思う。見込んだ弟子から見捨てられるような人を見る目のないキリストでは話にならない。ユダの真相は後述するので省くことにする。

最後に「処刑される」という予言について述べることにする。手引きとなる資料は次の二つのくだりである。

それから、彼らはエルサレムにきた。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買っていた人々を追い出しはじめ、両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえし、また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。そして、彼らに教えて言われた、「『わたしの家は、すべての国民の祈りの家となえられるべきである』と書いてあるではないか、それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にしてしまった」。マルコ 11:15-17

さて、祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするため、イエスに不利な偽証を求めようとしていた。そこで多くの偽証者が出てきたが証拠があがらなかった。しかし、最後にふたりの者が出てきて言った、「この人は、わたしは神の宮を打ちこわし、三日の後に建てることができる、と言いました」。すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのか。これらの人々があなたに對して不利な証拠を申し立てているが、どうなのか」。しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生きる神に誓つてわれわれに答えよ」。イ

イエスは彼に言われた、「あなたの言うとおりである。しかし、わたしは言っておく。あなたがたは間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう」。すると、大祭司はその衣を引き裂いて言った、「彼は神を汚した。どうしてこれ以上証人の必要があるう。あなたがたは今このけがし言を聞いた。あなたがたの意見はどうか」。すると、彼らは答えて言った、「彼は死に当たるものだ」。マタイ26：59 - 66

つまり神殿で暴動を起こすことで耳目をひき、裁判で不敬な言葉を吐いて自分を処刑させたのである。教会は神殿を清めるために行つたと教えているが、結果は同じである。「証拠があがらなかった」のであれば黙つていれば助かる。また神殿を冒涇した証言に対して、モエレミヤ書(7：4)の「あなたがたは、『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない」という言葉を引用すれば応じられたはずである。イエスほどの男がこの言葉を知らないはずがない。にもかかわらず、暴言を吐いて処刑の道をとっている。次の言葉を成就するためである。

「あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりつみびとに数えられた』としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばならない。そうだ、わたしに係わることは成就している」ルカ22：37

見よ、わたしはエルサレムへ上がって行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引き渡すだろう。

また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日後によみがえるであろう」。マルコ10：33 - 34

以上の言葉を成就させるためにカヤパ(大祭司)を怒らせる不敬な言葉を述べて死刑に持ち込んだのである。不敬罪は律法で死刑と定き

まっていたからである。だがこの「物語」も封印のための方便に過ぎない。この件も後述するので省くことにする。

ここでイザヤ書五三章を紹介する。有名な「イエス＝キリスト」の核心を成す「悲しみの僕」と呼ばれる予言である。長い引用となるが全文転載する。以下がその予言である。

イザヤ書 第五三章

1 だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。

主の腕は、だれにあらわれたか。

2 彼は主の前に若木のように

かわいた土から出る根のように育った。

彼にはわれわれの見るべき姿はなく、威厳もなく、われわれの慕う

べき美しさもない。

3 彼は侮られて人に捨てられ

悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって忌みきらわれる者のように、

彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

4 まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った。

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

5 しかし彼はわれわれにとがのために傷つけられ、

われわれの不義のために砕かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、
われわれはいやされたのだ。

6 われわれはみな羊のように迷って、
おのおの自分の道に向かって
行った。

主はわれわれすべての者の不義を、
彼の上におかれた。

7 彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、
口を開かなかった。

ほふり場にひかれて行く小羊のように、
また毛を切る者の前に黙っている羊のように、
口を開かなかった。

8 彼は暴虐なさばきによって取り去られた。

その代のうち、だれが思ったであろうか、
彼はわが民のとがのために打たれて、
生きるものの地から断たれたのだと。

9 彼は暴虐を行わず、

その口には偽りはなかったけれども、
その墓は悪しき者と共に設けられ、

その塚は悪をなす者と共にあつた。

しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、
主は彼を悩まされた。

彼が自分を、とがの供え物となすとき、
その子孫を見ることができ、
その命をながくすることができ。

かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。
彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。

義なるわがしもべはその知識によって、
多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。

それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に
物を分かち取らせる。

彼は強い者と共に獲物を分かち取る。

これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、
とがある者と共に数えられたからである。
しかも彼は多くの人の罪を負い、
とがある者のためにとりなしをした。

出生と家族構成について

福音書の読解を続けることにする。
基になる資料はマタイ伝である。

まずは出生の謎と家族構成から取り組むことにする。

処女降誕を取り上げているのはマタイとルカである。ともにイエスの家系図を示し、ベツレヘムを誕生の地とし、処女降誕を扱っている。処女降誕についてのマタイの叙述は次のとおりである。

イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、精霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことを公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリアを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは精霊によるものである。彼女は男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。これは、「神われらと共にいます」という意味である。ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリアを妻に迎えた。しかし、子が生まれるまでは、彼女を知ることがなかった。そして、その子をイエスと名づけた。マタイ 1：18 - 25

この話は「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる」（イザヤ書 7：14）という予言が元になっている。そして「主が預言者によって言われたことが成就するためである」としている。だがこの予言は成就しているだろうか。だれもイエスのことをインマヌエルとは呼ばないし、過去にも呼ば

れたためしが無い。つまりこの予言は外れたのである。これが事実であり、真実である。主の御使が外れる予言をするのだろうか。まずはこの点を抑えることが肝心である。

インマヌエルの予言の他にも「子が生まれるまでは、彼女を知ることがなかった」という点が重要である。ヨセフの身に覚えのない子がマリアの腹に宿っていることになる。不貞をはたらいた乙女は律法の裁きを受けることになっていた（申命記22：13-21）。因みにヨセフの悩みは不貞の疑惑であって「処女がみごもった」とではない。

もし人が妻をめとり、妻のところにはいった後、その女をきらい、「わたしはこの女をめとって近づいた時、彼女に処女の証拠を見なかった」と言って虚偽の非難をもって、その女に悪名を負わせるならば、その女の父と母は、彼女の処女の証拠を取って、門における町の長老たちに差し出し、そして彼女の父は長老たちに言わねばならない―しかし、この非難が真実であって、その女に処女の証拠が見られない時は、その女を父の家の前にひき出し、町の人々は彼女を石で打ち殺さなければならぬ。申命記22：13-21

つまり「処女から生まれる」とは「処女だった娘から生まれる」ことを意味している。ヨセフは「普通の娘」と信じていたマリアが不貞を働いたと疑って悩んでいるのである。オセロー的な悩みといえるだろう。この誤解を解くために御使がヨセフにお告げをする運びとなっているのだが、御使が来なかった（予言が外れた）となるとマリアの疑惑だけが残ることになる。この疑惑を晴らさないと、イエスは私生児となってしまう。ではイエスは私生児だったのだろうか。この問いのヒントとなるのが次の律法である。

私生児は主の会衆に加わってはならない。その子孫は十代までも主

の会衆に加わってはならない。申命記23:2

イエスはどうであったか。主の会衆に参加していた。よって、私生児ではない。私生児の疑いが無くなれば、必然的にマリアの疑惑も晴れて、ヨセフの悩みも消える。主の御使の「お告げ」も外れたとなると普通に生まれたとしか考えようがない。晴れて、ここに健全な一家が誕生するのである。

では、なぜマタイはこのような脚色を用いたのだろうか。この謎を解くキーワードが「精霊」である。この語は旧約にはない新約の造語的な概念である。この場合の精霊は「神の再創造の意思表示とその施し」と解釈できるだろう。ユダヤ教の本質は神との契約である。精霊を「新約」の「お告げ」と理解してこそインマヌエルの予言は成就するのである。事実、キリストによって「旧約」と「新約」の概念は成就している。この新約思想の神学化のためにこの脚色が必要だったのである。処女から生まれた怪物を世に送り出すのが目的ではない。この点も抑えておかなばならない重要な点である。

次は出生地について取り組みことにする。

イエスの誕生の地については、ナザレ説とベツレヘム説がある。ベツレヘムはダビデの生地であり、キリストが降誕する地と予言されていた。福音書は家系図を引用してダビデの家系の正当性を誇示している。一方、ナザレはイエスの故郷である。ベツレヘムから約150km離れた標高約350mの丘陵地に位置する町である。「ナザレから、なんのよいものが出ようか」（ヨハネ1:46）、このナタナエルの言葉が有名である。この程度の「村」という認識だった。発掘調査の結果、ナザレではかなり古くから農村共同体が営まれていたことが分かっている。学者の多くはナザレ説を採っている。果たしてどちらで生まれたのだろうか。まずは予言の確認から行う

ことにする。

しかしベツレヘム、エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。ミカ書5：2

エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。イザヤ書11：

1 - 2

エッサイはダビデの親父である。ダビデはこのエッサイの末っ子だった。この有名な予言を読むと、ダビデと特定されておらず、「エッサイの株から一つの芽が出」と謳っている。私が知る限りではダビデの子孫と明言する予言を見たことがない。実際当事者のイエスもダビデ子孫説を否定しているのである。

パリサイ人が集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった。

「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデは御霊みたまを感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち、『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言も答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなつた。マタイ22：41 - 46

このイエスの解釈は強引である（マタイの解釈と思われる）。通常「主」は神を指すのにキリストも「わが主」としている。これは「

主」の重複ではなからうか。キリストを主と呼ぶのは新約の慣わしであつて旧約にはメシアの概念は存在しない（唯一外典の『エズラ記』12:32-34に載っている）。後に取り上げる「モデルのキリスト」と「ナザレのイエス」の問題の片鱗がここに覗いているのだが、ベツレヘム論者のマタイの意に反したイエスの言葉を載せていることの意義は大きいだろう。

同様にミカも、ダビデとは言及せず、「ユダの氏族」としている。

このようにダビデの子孫説が危うくなつてくると自ずとベツレヘム説も怪しくなつてくる。この問題を解くヒントが次の予言の全文である。

さて、イエスはヨハネが捕らえられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリの地方にある海への町カペナウムに行つて住まわれた。これは預言者イザヤによつて言われた言葉が成就するためである。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ、暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼつた」。この時からイエスは教を宣べはじめた言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。マタイ4:12-17

マタイとルカはイザヤ書のこの予言を福音活動の宣言として引用している。だがこの引用の仕方には問題がある。都合の悪い箇所を省いて予言の成就としているからである。以下がその全文である。

しかし、苦しみにあつた地にも、闇がなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに栄光を与えられる。暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいる人々の上に光が照つた。あなたがたは国民を増し、その喜びを大

きくされたので、彼らは刈り入れ時に喜ぶように、獲物を分かつ時を楽しむように、あなたの前に喜んだ。これはあなたが彼らの負っているくびきと、その肩のつえと、しえたげる者のうちとを、ミデアンの日になされたように折られたからだ。すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、血にまみれた衣とは、火の燃えくさとなって焼かれる。ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」となえられる。そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもって、これを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされえるのである。イザヤ書9：1-7

このセンテンスを読むと、メシア的な人物はガリラヤで生まれると予言しているように採れる。「異邦人のガリラヤに栄光が与えられる」という句は、「ひとりのみどりご」、もしくは「ひとりの男の子」が生まれることを前提としている。ここでいう「あなた」と「わたし」の関係は、「あなたがたガリラヤの民」と「わたし」神（預言者を通じての神の予言）」と受け取るのが自然である。整理すると、ガリラヤに「ひとりの男の子」栄光」が与えられることを約束しているのである。だとすると、ガリラヤからもメシア的な人物が生まれると予言されていたことになる。つまりイザヤはベツレヘムで生まれると予言しながらガリラヤからも生まれると予言していたのである（ともに第二イザヤ以前の予言である）。このように予言されていたのであればイエスがガリラヤで生まれたとしても予言的には問題がないことになる。

さらにナザレに住む妊婦は昔からナザレで出産する慣わしを守っていたという（『歴史の中のイエス』ノガール・コーンフェルト著／山本書店）。子供が生まれると形式的な行事も行われていたら

しい（『イエス時代の日常生活』ノダニエル・ロブス著／山本書店）
。ナザレからベツレヘムまでは150kmほどの道程である。臨月
にあったマリアが因習を破ってこの距離を移動するだろうか。ルカ
の人口調査の件はまた確認されていないので論外である。ナザレで
生まれたとみるのが自然である。

だがダビデの子孫説を否定したからといってダビデの家系に属さな
かったことにはならない。予言の間違いを指摘することと、家系の
問題は別である。マタイとルカはアダムからイエスまでの長い家系
図を引用しているが、この二つの家系図には共通の名がゾロバベル
とサラテルしかなく、これでは証拠というより悩みの種でしかない
ここで登場するのが「ベツレヘムの星」なのである。『きよしこの
夜』が流れてきそうなこのドラマティックな話にこの謎を探るピン
トが隠されている。きわめて長い引用になるが全文を引用する。

イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになった
とき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「
ユダヤ人の王としてお生まれになったかたは、どこにおられますか
わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきまし
た」。ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人
々もみな、同様であった。そこで王は祭司長と民の律法学者たちと
を全部集めて、キリストはどこに生まれるのかと、彼らに問いただ
した。彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言
者がこう記しています。『ユダの地、ベツレヘムよ。おまえはユダ
の君らの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひ
とりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであらう』」。そ
こで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について
詳しく聞き、彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、そ
の幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。
わたしも拝みに行くから」。彼らは王の言うことを聞いて出かける

と見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。彼らはその星を見て、非常に喜びにあふれた。そして、家には行って、母マリアのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげた。そして、夢でヘロデのところに戻るなどのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国に帰って行った。彼らが帰って行ったのち、見よ、主の使が夢でヨセフに現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を探し出して、殺そうとしている」。そこで、ヨセフは立って、夜の間、幼な子とその母を連れてエジプトへ行き、ヘロデが死ぬまでそこにとどまっていた。それは主が預言者によって「エジプトからわが子を呼び出した」ということが、成就するためである。さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、非常に立腹した。そして人々をつかわし、博士たちから確かめた時に基づいて、ベツレヘムとその付近の地方にいる二歳以下の男の子を、ことごとく殺した。こうして、預言者エレミヤによって言われたことが成就したのである。「叫び泣くおおいなる悲しみの声がラマで聞こえた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、癒されることさえ願わなかった」。さてヘロデが死んだのち、見よ、主の使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでしまった」。そこでヨセフは立って、幼な子とその母を連れて、イスラエルの地に帰った。しかし、アケラオがその父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこへ行くことを恐れた。そして夢でみ告げを受けたので、ガリラヤの地方に退き、ナザレという町に行つて住んだ。これは預言者たちによつて、「彼はナザレ人と呼ばれるであろう」と言われたことが、成就するためである。マタイ2章全文

この予言は次のふたつの予言が元になっている。

主はこう仰せられる。「嘆きの悲しみ、いたく泣く声がラマで聞こえる。ラケルがその子らのために嘆くのである。子らがもはやいなので、彼女はその子らのことで慰められるのを願わない」。エレミヤ書 31:15

多くのらくだ、ミデアンおよびエパの若きらくだは、あなたをおおい、シバの人々はみな黄金、乳香を携えてきて、主の誉を宣べ伝える。イザヤ書 60:6

マタイは、ソロモンをイエス、シバの女王（列王記上 10:1-5）を三博士になぞえて脚色している。実話でないことは次の律法を読むと分かる。

あなたの神、主が賜わる地にはいったならば、その^{くにくに}国^{くに}の民の憎むべき事を習ってはならない。あなたがたのうちに、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげる者があつてはならない。また占いをする者、卜者、易者、魔法使い、呪文を唱える者、寄せ、かんぬき、死人に問うことをする者があつてはならない。主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである。申命記 18:9-12

三博士は占星術に長けたバビロニアのマギ（祭司）とみられている。だとすると、主が忌み嫌う者たちだったことになる。律法学者がこの律法を知らないことは考えられない。タルムードの『ネズイキーン巻』（『タルムード』ノ三好迪監・宇佐美公史訳ノ三貴社）に「星辰崇拜」についての厳しい取り決めがみられる。実話なら律法学者が聖地に入ることを許すはずがない。無断で入ればすぐにつまみ出されていたはずである。これは完全にマタイの創作である。

実際この「創作」でのマタイの捏造には目に余るものがある。最後に「『彼はナザレ人と呼ばれるであろう』という予言が成就するためである」としているが、このような予言は聖書に存在しない。この予言が無くなるとナザレに移り住む理由がなくなつてこの話は破綻する。封印が裏目に出た好例といえる。

ではヘロデの事件も創作なのだろうか。このヘロデの事件は多分にヘロデならやりかねないという憶測が基になっている。妻子でも情け容赦なく暗殺する猜疑心の強いヘロデなら自分を脅かすものはどんな些細な芽も許すはずがないというヘロデ像である。この事件が史実であれば、ベツレヘムは小村だったことから殺された子供の数は少なかつたはずである。むろん数の問題ではないが、ヘロデの畜生的な蛮行の陰に埋もれて忘れ去られたということは無いとはいえない。出所は不明だが、J・リチヨッティによるとこの噂がローマで流れていたという（『キリスト伝ノジョゼツペ・リチヨッティ著ノドン・ボスコ社』。「火の無いところに煙はたたず」という諺があるが、ユダヤでなくローマで流れていた点にこの噂の真相が読める気がする。

実話であれば「キリスト降誕」の噂も流布していたと捉えなければ動機を失ってしまう。果たして占星術的な事件は起きていたのだろうか。むろん起きていたのである。全世界的な出来事だったといわれている。その一例が以下の記事である。

ローマ帝国では、ときの皇帝アウグストゥスが人間の姿をとったユピテル（木星）であり、終末のときの支配者である、と考えられていた。また、金星はアウグストゥスの属するユリウス家の星であり、土星は黄金時代を象徴するものであった。こうして、木星のできごととはアウグストゥスのできごとであり、前七年の木星の異常軌道は、アウグストゥスの生涯の輝かしい頂点を示すものと考えられた（『

ローマ帝国とキリスト教』世界の歴史5 / 弓彫達著 / 河出書房新社)

前七年はヘロデの時世 (B・C 40 ~ 4) と一致する。当時のユダヤがローマの隷属国だったことを思うとこの話題がユダヤに届かなかったことは考え難い。ユダヤ人にとって終末の支配者はアウグストウスではなくキリストである。アウグストウスがキリストにすり返られて話題となっていた可能性は十分あり得る。

だが現時点では以上がこの問題の限界である。福音書は「予言」と「真理」のセットで成り立っている。真理を使えば因数分解的に解明できるのだがまだ真理を説く段階ではないのでこの問題は以上で留めることにする。

最後に家族構成について取り組むことにする。

処女降誕説が怪しくなってくると長男説も疑わしくなってくる。この問題は処女云々の問題ではなく長男の責任と権利の問題である。この問題はこの節にかけて行わなければならない。基になる資料は福音書のあやふやな二つの家系図である。まずはマタイとルカの家系図を転載する。

ーエルウデはエレアザルの父、エレアザルはマトンの父、マトンはヤコブの父、ヤコブはマリアの夫ヨセフの父であった。このマリアからキリストといわれるイエスがお生まれになった。マタイ1:1
5 - 1 6

イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ三十歳の時であって、人々の考えによれば、「ヨセフの子であった。ヨセフはヘリの子、それから、さかのぼって、マタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、ヨセフ、-ルカ3:24

長い系譜なので最後の部分のみを列記したが、見てのとおり祖父の名も曾祖父の名も違っている。福音書によると、イエスにはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダの男の兄弟と姉妹がいたという（マタイ13：55-56）。「大工の子」と記されていることからヨセフの職業は大工で、イエスも大工だったという見方が定着している。これがヨセフ一家の家族構成であれば次の出来事の身内はヤコブたちだったにちがいない。

イエスが家にはいられると、群衆がまた集まってきたので、一同は食事をする暇もないほどだった。身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取り押さえに出てきた。気が狂ったと思っただからである。マルコ3：20-21

長男説を採ると、弟たちがイエスを取り押さえに飛んできたことになる。弟が人前で兄を取り押さえることは不自然なことではないにせよ、「取り押さえる」という強権的な表現には違和感を覚える。また当時のユダヤには従兄弟の概念がなかったことからヤコブらを従兄弟とみる向きがある。ひとつの考えとしては参考になるがこれだけではなんともいえない。

マタイの家系図はイエス長男説を否定する「確証」である。この家系図に因ってだれが長男であったのが判明する。改めて引用するので祖父の名に注目してほしい。

「エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、ヤコブはマリアの夫のヨセフの父であった。このマリアからキリストといわれるイエスがお生まれになった。マタイ1：

この家系図をみると、イエスの父はヨセフで、祖父はヤコブだったことが分かる。そして次の記事に因って長男が判明するのである。

イスラエルには家族名はなかったが、父親の名を継いだり祖父の名を与えたりして、その系譜が示された。例えば、ヨナの子シモンはベン（バル）・ヨナ・シモンという具合で、祖父の名が付けられるのは父親と区別するためで、長男に家系を示すために与えられた。

（『聖書時代の生活？』 / 左近義慈・南部泰孝著 / 創元社）

つまりヤコブが長男だったのである。父ヨセフと兄弟のヨセフは同じ名である。よってヨセフが長男だったことはありえない。だがヤコブは祖父の名である。父親のヨセフと区別するために祖父の名、すなわち「ヤコブ」が長男である「かれ（ヤコブ）」に与えられたことをこの家系図は示している。このように理解しないとこの家系図を継承する意味がない。よってルカの家系図は当時の因習に反した疑わしいものといわざるを得ない。ルカの家系図はヘレニスト（ルカ）とユダヤ・キリスト教団^{マタイ}の対立から生じたものと思われる。以上のことからこの家系図を書き直すと次のようになる。

ー エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマトンの父、マトンはヤコブの父、ヤコブはヨセフの父、ヨセフはヤコブの父であった。

実際イエスが長男であればマリアは必要ないのである。「ヤコブはヨセフの父であり、ヨセフはキリストといわれるイエスの父であった」で通じる。それを「このマリアからキリストといわれるイエスがお生まれになった」という書き方をしている。これでは長男が長男でないか判然としない。家系図はその名の男の子に家長の権利と重責を譲渡したことを表している。古代の厳格な家父長制の社会を無視したのでは家系図を取り上げる意味がないのである。

ここで視点をかえてみたい。

人間は社会的な動物といわれている。この「社会的な動物」という概念は「社会的存在」の同類とみなすことができる。辞書を引くと、社会的存在とは「社会の実存的な土台であつて、社会意識を決定するものとみなされる」と記されている（『広辞苑』 第五版／岩波書店）。当時のユダヤでも長男の権力は絶大だった。財産分与の件（けんぶん）だけでなく発言力や強制力でも他の兄弟を圧していた。特に土地や家系を守ることは義務だったのである。このような社会の中でイエス長男説は可能だろうか。男は十八位で、女は十五六で結婚することを美德としていた社会で、長男が結婚もせず、子供もこしらえず、家族の面倒を放棄し、気が狂ったと思われるような身勝手な行動がとれるだろうか。またこのような者の教えに耳を傾け、敬い、信じる者が居るだろうか。この手のことがまかりとおるのであれば社会は無いに等しく必要もないだろう。イエス長男説は社会的存在の理念を無視した無理なこじつけとしか思えない。

ではヤコブはどうであつたか。ヤコブは「義人ヤコブ」としてイエスの兄弟の中で唯一知られる著名な兄弟である。ヤコブはイエスの活動には否定的だったといわれている。イエスがナザレに戻ったときも冷たくあしらっていた節がみられる（ヨハネ4：16-30）。兄弟で取り押さえに来たときもその場に居たにちがいない。要するにイエスはヤコブには頭が上がらなかつたのである。

復活したイエスが最初に現れたのもヤコブといわれている。イエスは真つ先にヤコブに復活を告げていた。伝説であろうが、この伝説が生まれたことにはそれなりの理由（わけ）があるにちがいない。このヤコブがイエスの死後改心して「義人ヤコブ」となるのである。ここで注目すべき点は改心しただけでなくエルサレム教団の長老として責任者の権力を振るっていたことである。あの豪胆なパウロでさえ

ヤコブの意向を無視することができなかつた（使徒行伝15：12 - 21）。エイセビオスの『教会史』を読むと使徒たちの存在はヤコブの威光の前で霞んでしまっている。福音活動に参加しなかつた弟にこれほどの力がふるえるだろうか。「長老」という地位は弟に似つかわしい身分だろうか。兄とみた方が自然ではなからうか。ヤコブが師のイエスでさえ頭が上がらない存在であれば、使徒たちにとっては脅威以外の何者でもないだろう。事実、エルサレム教団は「ナザレ人の宗派」ともみられていたのである（『荒井献著作集4』／岩波書店）。使徒の中にナザレ人は一人もいないのにこのようにみられていたとすると長老ヤコブの力がいかに大きかつたかが分かる。

だが長男が地元を離れて移り住むことは当時の因習に反している。しかし家族からキリストが生まれたのであれば話は別である。家の名誉に関わるだけでなく、それが神の意思となれば家長が全責任をもって対処しなければならぬ。ヤコブに男の子が居ればその子に家督を譲れる。居たと仮定するとこのイエスの甥は大人だったにちがいない。イエスの理解者だったマリアはヤコブの上京に同意するだろう。長兄^{ヤコブ}が弟^{イエス}を利用した勝手な真似を許さないために郷里^{ナザレ}からエルサレムに乗り込んで目を光らせていたのでなければエイセビオスの記事のようにはならないのではなからうか。

いずれにせよ福音書の記事を妄信するのであれば取り組む意味がない。また「封印」という観点からみても正しい姿勢とはいえない。イエスは長男でなければならぬのだろうか。ヤコブの名誉のためにこのことを強く主張してこの章を終えることにする。

公活動まで

公活動の以前のことはほとんど分かっていない。福音書が伝えてい
ることは、バプテスマのヨハネから洗礼を受けたこと、荒野で悪魔
の試みを受けたこと、十二歳のとき教師たちを驚かせる才能をみせ
たこと程度である。

この間の福音書の構成は次のとおりである。

- ・ユダの荒野でヨハネから洗礼を受ける（マタイ3章）
- ・ユダの荒野で悪魔の試みを受ける（マタイ4章）
- ・カペナウムへ宣教に向かう（マタイ4：13）

この一連の流れをつかむには聖書独自の句を理解することが大切で
ある。4は死、7は幸運、9は苦しみ、といったジンクスがあるよ
うに聖書にも独自の慣用句が使われている。この構成の中で重要な
句は、四十、荒野、洗礼、御霊、悪魔である。これらの句の意味か
らイエスの消息をつかむことができる。まずはメジャーな「四十」
から取り組むことにする。

四十の意味の説明は不要と思う。以下の四十の一例である。

- ・雨は四十日四十夜、地に降り注いだ。創世記7：12
- ・医者たちはイスラエルに薬を塗った。このために四十日を費やし
た。創世記50：1-3
- ・モーセは四十日四十夜、山にいた。出エジプト記24：18
- ・こうして後、国は四十年のあいだ太平であった。士師記5：31
- ・ダビデはその先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られた。ダビデ
がイスラエルを治めた日数は四十年であった。列王記上2：10

以上の例を読むと四十という数字の意味は数ではなく、「一定の長い期間」を意味していることが分かる。イエスは御霊によって荒野へ導かれてからヨハネが捕まるまで荒野に居たという。だとすると、この四十という数字はこの期間を示し、この期間が長かったことを表しているにちがいない。四十日の断食は死を意味するのだから日数と解釈するのは不合理である。したがって「空腹」と「悪魔」も別の意味を表していることになる。

ではなぜ荒野を選んだのだろうか。『図説新約聖書の考古学』（関谷定夫著／講談社）に適切な解説が載っている。

砂漠（荒野）は古来イスラエル人にとってきわめて重要な意味をもっていた。すなわちそれは政治的亡命の地であり、精神的革命運動の基地であった。

この記事を読むと、何のために荒野へ行き、なぜ長く留まっていたのか気付くのはなかるうか。政治的な亡命が理由でなければ精神的なことが動機だったことになる。またユダの荒野にはクムラン教団のような独身を貫く思想集団が居たことも理由のひとつに挙げられるだろう。結婚が義務だった時代にこの義務を放置すればナザレに居づらくなり、居場所を求めて移り住んだ可能性がある。

クムラン教団とは、独身主義をとる点や終末に強い関心を抱いている点、それに私有財産の否定や相互愛の精神などの類似点がある。聖書を持っているはずがないのだから研究するためには写本が必要だったはずである。キリストが人から聖書を学ぶのは奇妙な話だが完全な独学では律法学者を負かすのは無理である。熱心党のシモン（熱心党＝過激分子、十二使徒のひとり）の存在も荒野での姿を想起させる。シモンとは荒野に居た時期からの知り合いだったの

ではなかるうか。因みに十二使徒のメンバーは福音書によって異なるのだが、このシモンは間違いなく使徒だったようである（『イエスの弟子たち』/ウイリアム・バークレー著/大島良雄訳/新教出版社）。

イエスが大工だった件も長男でなければ事情が変わってくる。弟の進路も父親の判断に委ねられていた。ヨセフがどのような判断を下したか不明だが、ナザレのような寒村に大工が何人も必要とは思えない。大工の技術があれば移り住むことは可能である。おそらくイエスはこの手段を使って暮らしていたのではなかるうか。後にナジールの請願を立てるヤコブが長男と仮定すると、ヤコブとイエスの考えが噛み合うことはありえない。ナザレからユダの荒野へ行き、長い下積みの生活を送っていたことの背景には以上のような事情が描かれているのではなかるうか。

では断食は何を意味しているのだろうか。まずは次のくだりを見てほしい。

モーセは主と共に、四十日四十夜、そこにいたが、パンも食べず、水も飲まなかった。そして彼は契約の言葉、十戒を板の上に書いた。出エジプト記 34:28

さて、イエスは御霊によつて荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして、四十日四十夜、断食をし、そのちに空腹になられた。マタイ 4:1-2

次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの

神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。そこで、悪魔はイエスを離れ去り、そして、御使たちがみもとにきて使えた。マタイ4：8 - 11

以上のくだりを比較すると、この断食の意味はモーセの十戒を意識した「旧約」と「新約」の比喩であることが分かる。「四十日四十夜」、「シナイ山と非常に高い山」、「十戒の授与と悪魔に打ち克つことでキリストの証を立てること」の対比がみられる。悪魔の誘惑を超克したからこそ御使たちはイエスに使えたのである。御使が悪魔に敗れる者に「使える」はずがない。「空腹」はこの話がフィクションであることを表している。四十日も断食をすれば死ぬことはすでに述べたとおりである。

残すは「御霊」と「洗礼」である。困ったことに「御霊」と「精霊」がどう違うのか未だに要領を得ないのが本音である。訳によつては「霊」（ギリシャ語新約聖書、など）と訳してあるものもあり、辞典でもつかめず、ただ単に「霊」の丁寧語でしかないように思えてならない。私は「霊」が正しいのではないかと考えている。「霊」でないとヨハネの水の洗礼の解釈に支障を来たすからである。ヨハネは次の予言を意識していたにちがいない。

わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、またあなたがたを、すべての偶像から清める。わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる。あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住んで、わが民となり、わたしはあなたがたの神となる。エゼキエル書36：25 - 28

霊は「命の息」を意味している。この命の息は創世記の次のくだりに由来するといわれる。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。創世記2：7

つまり水の洗礼は新しい命の息（霊）を水で授けることを意味しているのである。そして新しく生きるためには悔い改めることを絶対条件とするというのがヨハネの神学的な救済論である。イエスはこのヨハネと誼を結んでいたようである。

福音書は二人の関係を「エリヤ（預言者）」「ヨハネ」、「キリスト」「イエス」とすることで予言の成就としている。エリヤ足るヨハネと、キリスト足るイエスを引き合わせる神学的な媒介として御霊が必要だったのである。「イエスは御霊によつて荒野に導かれた」¹¹。「イエスは神から命の息を吹き入れられて荒野へ向かった。新たに生きる者となるためである」とするには水の洗礼者ヨハネが不可欠であり、このヨハネから洗礼を受けることによつてキリスト（新たに生きる者の象徴）という神学を完成させねばならなかったからである。これを表しているのが次のくだりである。

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下つて来るのを、ごらんになった。すると天から声があつた、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。マルコ1：9 - 11

完成したからこそ聖霊が下つて神の声があつたのである。だがこれは神学上の脚色であつて、実際は精神的な革命を自己にもたらし、それが目的だったのである。これ以外に荒野へ向かう理由がない。そして「真理」を見いだすことでこの革命を達成したのである。

悪魔については説明は不要と思う。「悪魔の試み」を換言すると「悪魔祓い」になる。「悪魔」という概念は旧約には馴染みのない概念で、ヨブ記は例外に属する。「悪魔祓い」は芸術家がよく使う表現である。その芸術家の「悪魔祓いの書」や「悪魔祓いの絵」といった表現で使われる。ピカソやランボ才関係の本を読むと出くわすはずである。イエスほどの宿命と才能を背負った人物であれば当然この手（悪魔祓い）の精神的な危機を乗り越えているにちがいないという憶測がこの話の元になっているにちがいない。

以上がこの章のすべてである。

公活動

イエスの活動の特徴は、民衆を相手にしている点と、流血を避けている点にある。バプテスマのヨハネのスタイルはかれの下に訪れた者のみを対象とした個人的なものである。その教えも水の洗礼を受けることによって旧約の神の火の報復を鎮める（悔い改める）という抽象的な救済論である。だがイエスは自分の言葉で悔い改めることを促している。その内容も「愛」や「信仰」など多岐に渡って取り上げている。クムラン教団は完全に時代に背を向けてユダの荒野に引き籠もっていた。これに対してイエスはユダの荒野を出て民衆の前に現れている。熱心党はテロやゲリラ戦も辞さない過激な思想集団であったが、イエスは剣をもつことを認めていない。では預言者のスタイルだったかという点、これも違っている。預言者は決して次のような言動はしないからである。

聞く耳のある者は聞くがよい。マルコ7：16

これがイエスのスタイルである。預言者がこんな暢気なことを言うはずがない。預言者は時代を鋭く洞察する批判者であり、預言者を強く自負していたことからその論調はヒステリックな独善論に陥りがちで、神を盾に一方的に民衆を責める向きがある。これに対してイエスは積極的に教えを説こうとはしない。その教えも大概はたとえ話である。奇跡も状況に応じて施している。民衆を奮起させるどころか溶け込もうとする姿勢が窺える。

では、なぜこのようなスタイルを貫いていたのだろうか。説得することが目的ではないからである。「聞く耳のある者は聞くがよい」という言葉には「交わり」を重視するイエスの思いが籠められている。「予言」ではなく「福音」として説いている。福音に過激な言

動が必要だろうか。受け入れるか否かは個人の問題である。よって牧歌的な宣教とならざるを得ないのである。

このスタイルには政治的な意図も含まれている。エルサレムで罪人として処刑され、死後復活するのであればヨハネのような過激な活動は控えねばならない。ヘロデ党（ヘロデ・アンティパスの手先）から危険分子と疑われることも避けねばならないだろう。したがって「イエスの評判がシリア全土にひろまり、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうからおびただしい群集がイエスに従った」といった出来事は無かったはずである。ヘロデが無断でこのような大々的な活動をする者を放っておくはずがない。またこれほどの影響力を示せばローマも乗り出してくるかもしれない。これではエルサレムに行く前に処刑されてしまうだろう。

この見方は予言の観点からみても正しいはずである。

わたしの支持するしもべ、

わたしの喜ぶわが選び人を見よ。

わたしはわが霊を彼に与えた。

彼はもろもろの国びとに道をしめす。

彼は叫ぶことなく、声をあげることもなく、

その声をちまたに聞こえさせず、

また傷ついた葦を折ることもなく、

ほのぐらい灯心を消すこともなく、

眞実をもって道をしめす。

彼は衰えず、落胆せず、

ついに道を地に確立する。

海沿いの国々はその教えを待ち望む。イザヤ書 42：1 - 4

この「海沿いの国々」はカペナウムとも解釈できる。ガリラヤは「

異邦人のガリラヤ」と揶揄される異国民との雑居の地であり、カペナウムはガリラヤ湖畔のユダヤ人の町として知られていたからである。イエスの活動もこの予言の趣旨を満たしている。

ところでイエスは自分をキリストとは思っていなかったという見方がある。詳細は後述するが、仮にキリストと思っていなかったのであれば次の言葉はどのように解釈したらよいのだろうか。

大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。

イエスは言われた、「わたしがそれである。」。マルコ14:6
1-62

この返事は共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）のすべてに記されている。ヨハネも違った表現でこの返事を取り上げている。「わたしがそれである」と答えているのにそう思っていなかったとなると、この返事は捏造された言葉ということだろうか。だとすると、

大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。

イエスは言われた、「ちがいます」。

これが正しい返事ということになるだろう。イエスはキリストと勘違いされて十字架に磔にされて処刑されたという解釈だろうか。だとすると、次の自信はどこから来るのだろうか。

すべての預言者と律法とが予言したのは、ヨハネの時までである。

マタイ11:13

あなたがたに言うておく。宮より大いなる者がここにいる。マタイ

そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿を壊したら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。ヨハネ2:18-19

自分を神殿より大いなる者と断言している。この言葉は異常である。ユダヤ人は神殿を文字通り「神」の「殿」と信じていたからである。ユダヤ人は人類で最初に信仰に殉教した民族といわれている。神殿や信仰についてはローマでさえ腫れ物にでも触るように気を使って統治していたのである。その神殿を公然と誹謗し、自分の方が優っていると公言している。イスラム教徒の前で「クムラーン（コーラン）」を焼き捨てるようなものである。無事でいられるはずがないだろう。事実これが処刑の一因となっている（マルコ14:58）。以上の言動も捏造と考えているのだろうか。根拠が不明である。この件は裁判の項で明らかにするのでこれ以上は省くことにする。

ここで本稿のはじめに提示した弁証法の定式を思い出していただきたい。

テーゼ イエスは言われたキリストだった
アンチテーゼ イエスは言われたキリストだったわけではない
ジンテーゼ イエスは言われたキリストではなかった、ゆえに、わたしたちのキリストだった

なぜこの定式が成り立つのだろうか。

これを証明する証拠があり、証人がこの世に居るからである。

隠されているもので、あらわにならないものはなく、秘密にされて

いるもので、ついには知られ、明るみに出されないものはない。ルカ8：17

と、イエスは語っている。

このとおりになるにちがいない。

この考察の契機となるのが次のくだりである。

イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいない、いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。マルコ2：17

丈夫な人が義人で、病人が罪人で、医者がイエスであることを指している。だとすると、イエスはこの「罪人」を相手にしていたことになる。ではこの罪人はなにを意味しているのだろうか。答えはイエスの教えをみれば分かるだろう。罪人と無関係な活動ことをするはずがないからである。このために教えを大別すると次のようになる。

「信仰について」、「愛について」、「律法の解釈について」、「処世術について」、「終末について」、「復活について」、「律法学者とパリサイ人の偽善について」、「神について」、「神の国について」、「『人の子』について」。よって罪人とは、信仰の無い（薄い）者であり、愛を知らない（行わない）者であり、律法を誤解している者であり、処世の下手な者と悪事を働く者であり、終末のことを知らない者であり、偽善な律法学者とパリサイ人であり（偽善ではない律法学者とパリサイ人は別である）、神を誤解している者であり、神の国を知らない者であり、「人の子」を誤解している者の総称もしくは代名詞ということになる。だとすると、すべての者が罪人ということになるだろう。イエスのレベルで生きれる者は居ないからである。このことは、

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるが

よい」ヨハネ 8：7

という言葉に表れている。

ここで視点を換えることにする。

ここで重要となるのが「奇跡」である。福音書は福音の他に「奇跡を行った」と記している。病人を癒したり、死者を蘇えらせたり、湖上を歩いたり、嵐を鎮めたり、水をぶどう酒に変えたりといった奇跡を行ったという。だが罪人にこれらの奇跡は必要だろうか。これらの奇跡で治るだろうか。この手の奇跡を「行わなかった」ことはすでに考察済みである。奇跡行為は人心掌握的な要素を含んでいる。この手の超常現象的な奇跡を披露すれば反響は絶大である。神の子の証明といっても過言ではないだろう。だがこれはエルサレムで処刑されるつもりであるのであれば自分の首を絞めているのと同じである。ヘロデが黙っているはずがないからである。イエスはエルサレムで処刑されている。よってこの手の奇跡を行わなかったにちがいない。換言すると、エルサレムで処刑されるつもりでいたのであれば奇跡が行えたとしても行うわけにはゆかなかったのである。

ではこの奇跡はなにを意味しているのだろうか。この点が重要である。イエスの奇跡は精神療法的なものという見方が有力である。私もこの見方を支持している。たとえば、死者を蘇えらせる奇跡にしても死者を生き返らせたのではなく、亡くなつた遺族の深い悲しみを癒したという見方である。病に苦しむ者がイエスの衣に触って治つたのも（マルコ 5：25 - 34）、同じく盲人たちが群衆の中で大声を張り上げてイエスを呼びそして治してもらつたのも（マタイ 20：30 - 34）、右手のなえた者の手が元どおりになつたのも（ルカ 6：6 - 10）皆彼らの心の苦しみを癒したことを表しているという見方である。

このように言うのと興ざめする方も居るだろうが、そもそも「この考え」が間違っているのではなからうか。たとえば盲人の心の苦しみを癒すことは容易だろうか。盲人は目が治らないともはや絶望と諦念の道しか残されていないのだろうか。この閉ざされつつある道（心）を拓くことができる者が居るとすれば、かれ（彼女）はまさに救い主であり、奇跡を行ったに等しいのではなからうか。同様に息子や娘を失って打ちひしがれている遺族の深い悲しみを癒すことは生易しいことではないだろう。「能ある鷹は爪を隠す」の箴言ではないが、奇跡ができるからといってそれを不用意にひけらかす幼稚なキリストより、それをひた隠しに隠しながら静かに弱者を見守るキリストこそまさに神の子にふさわしいのではなからうか。またこのような聖人であってこそイザヤの予言（イザヤ書42：1-4）は成就するのである。

では、なぜ治った（癒された、悟った）のだろうか。この事情を見事に表現しているのが次の長いくだりである。

あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいつて食卓に着かれた。

するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓についておられることを聞いて、香油が入れてある石膏せっこうのつぼを持ってきて、

泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。

イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。

そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある。」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。

「イエスは言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりには五百デナリ、もうひとりが五十デナリを借りていた。

ところが、返しことができなかつたので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。

シモンは答えて言った、「多くをゆるしてもらつたほうだと思いません」。イエスは言われた、「あなたの判断は正しい」。

それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時、あなたは足を洗う水をくれなかつた。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。

あなたはわたしに接吻をししてくれなかつたが、彼女はわたしが家にはいつた時から、わたしの足に接吻してやまなかつた。

あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかつたが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。

それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。

すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。

しかし、イエスは女にむかつて言われた、「あなたの信仰があなたを救つたのです。安心して行きなさい」。ルカ7：36 - 50

彼女が救われた理由はいたって単純である。イエスに愛されたからである。愛は愛されて「愛」の「喜び（救い）」を知る。努力（愛）が認められた歓喜が彼女を救つたことは言うまでもない。相手がイエスだったからである。たとえば、命懸けで書いた絵がピカソに認められるのと他の人に認められるのとでは一緒だろうか。またこの経験から得た自信と未来は一緒だろうか。一緒でないことは言うまでもないだろう。ピカソが特別な宿命と天分をもつた天才と呼ぶにふさわしい偉人だからである。彼女が恥も外聞も捨て、全財産（香

油が入れてある石膏の壺）を賭けて一身に救いを求めた男は二度とこの世に現れないであろう不世出の宿命をもった神の分身ともいうべき人物だった。事実イエスからキリストの尊称を奪い取った者は居ない。そしてこの男に衆人環視の下で公然とその努力が認められたいうえに優しい言葉をかけてもらえたのである。つまりイエスの愛を努力でかち取った（愛に包まれて目覚めた）のである。彼女が救われないわけがないだろう。

以上のことをまとめると、イエスの公活動は次のふたつに絞られることになる。「福音」と「受難」である。よって、イエスが成就させたのはこのふたつに係わる予言だったことになる。福音書に記されているような或る予言の一節だけを切り取って成就したとするのではなくその予言の趣旨を満たす方法をとったのである。

実際福音書のやり方は成就に値しない。ただ予言どおりに「行^いって」、「行な^いって」、周囲を驚かせただけである。辞書を引くと、成就とは「できあがること。成し遂げること。成功。」（広辞苑 第五版／三省堂）を意味するという。或るセンテンスの一節を切り取ってその節を満たすことと、そのセンテンスの趣旨を成就させることは同じではない。「成就する」という動詞はアラム語だと「シヤマ^リ」というそうである（『日本語―セム語族比較辞典』／飯島紀著／国際語学社）。私は、アラム語も、ヘブライ語も、ギリシヤ語も読めないが、品詞については問題ないのではなからうか。

「福音」と「受難」の問題に戻ると、イエスが行な^いった活動の軸が福音と受難の成就だったことは事実である。なぜなら、「われわれ」がその「証人」として存在しているからである。後世のわれわれはイエスが世に残したものを知っている。それはイエスが語った言葉と十字架に磔にされたという最期である。成就したからこそ世に残っているものであり、辞書はこのような現象を「成就」としている。

つまり、成功し、できあがった「証拠」なのである。

だが福音書にはこの他にも超常現象的な奇跡や大衆の関心を引く姿が描かれている。それらの奇跡は世に残されているだろうか。だれもがこの超人的な奇跡譚に戸惑いを隠せずにいる。つまり成就していないのである。これが「われわれの事実」であれば始めからこれらの奇跡はなかったと断言できる。そのとき成就したのであれば今も成就していなければ「成就」とはみなせないからである。これは言葉のアヤではなく大事な事実確認の作業である。イエスが成就した予言は「福音」と「受難」だったことが「われわれ」によって証明されたのである。これこそまさに、

隠されているもので、あらわにならないものではなく、秘密にされているもので、ついには知られ、明るみに出されないものはない。ルカ8：17

という先のイエスの予言の証明といえる。

ここで視点を変えることにする。

福音書は何のためにつくられたのだろうか。原始教会が「キリストのモデル」を必要としていたからである。イエスをモデルにしたのではなく、教会を守るためにモデルのキリストが必要だったのである。これにはふたつの大きな理由が考えられる。

ひとつは旧約にメシア（キリスト）の概念がなかったからである。つまり旧約にはメシアという言葉が一度も使われていないのである（外典の『エズラ記』12：32-34の一箇所のみられる）。だとすると、キリストという概念は精霊同様教会の造語的な概念の要素が強いことになる。事実、イエス自身が、キリストと、人の子と、自分を混同して語っている。それはそのはずで、旧約にメシアの概

念が無ければメシアについての予言も怪しくなる。この問題を「人の子」で補おうとするために矛盾が生じて整合性を欠くのである。イエスの目的は福音を説くことにあった。キリストも、人の子もこの一貫として語られることになる。キリストが自分でキリスト論を樹立するほど滑稽なことがあるのか。はっきり言って時間の無駄である。ところが教会は初めてキリスト論を打ち立てねばならなかったのである。メシア（キリスト）の概念が不明瞭で統一されていない以上イエスをキリストとする信仰を明確化し、受け入れられるかたちをつくらなければ生き残れなかった。

その結果誕生したのが、イエスとモデルのキリストを融合した「イエス・キリスト」である。そしてこの「イエス・キリスト」について記した彼らの聖典が福音書なのである。よって福音書にはイエスの言動とモデルのキリストの言葉が混在しており、これらには必要に応じて使い分けられている。超常現象的な奇跡や、エリヤやエリシヤなどの過去の預言者についての話、それに終末についてのダニエル調の予言などはモデルのキリストの言葉である。だがイエスがモデルのキリストによって消滅してしまったのでは意味がない。このために封印という方法を使ったのである。イエスを活かすにはこれしかなかったからである。この傑作（福音書）を創り上げるための戦いはまさに十字架を背負ってゴルゴダの丘を上るほど苦しいものだったにちがいない。もっとも古いとされるマルコでさえ四十年、ヨハネにいたっては七十年近い歳月をかけて創り上げている。「ナザレのイエス」を信じていなければできないことではないだろう。イエスの愛が報われたのである。

では、なぜあのような大掛かりな脚色が必要だったのだろうか。これがふたつ目の理由である。この理由は現実的なことに基づいている。イエスが罪人として処刑されたからである。その処刑方法もローマの極刑法の中でもっとも恐れられ蔑まれていた十字架に磔にさ

れての公開処刑だった。しかもこれが正規の裁判（この件は後述する）を受けての処刑となると事は深刻である。極刑に処した死刑囚の仲間が集まってこの死刑囚を「キリスト」と崇め、その復活を信じ、その教えを習い、その死刑囚を賛美する歌を歌い、信者獲得のために活動しているとなると反体制的な教団とみなされても仕方がない。さらに十字架刑の象徴である「十字架」を教団のシンボルに掲げ、それにひれ伏して祈りを捧げているのだとしたら狂人とみられても致し方ないだろう（当初は「魚」がキリストのシンボルだった）。いまの日本でいえば絞首刑の象徴である首輪をシンボルにしているようなものである。

このような状況の中でヤコブが上京し、パウロが使徒に加わり、長い試練と試行錯誤の末にあの「旧約」と「新約」という天才的な着想に至って世界宗教への道を拓くのである。「キリスト記」や「メシアの書」といったタイトルに仕上がったのはイエスの念が福音に籠められていることを心得ていたからにちがいない。

俗論的な見方をとると、福音書の戦略は『忠臣蔵』のようなものである。吉良上野介の役がユダヤ当局であり、浅野内匠頭の役が「無垢の子羊」であるモデルのキリストであり、大石内蔵助の役が真の主役である「ナザレのイエス」であり、四十七士の役が十二使徒である。ピラトを、イエスを擁護する善人の役として登場させることでユダヤ当局への盾としている。そして吉良低に討ち入るようにキリストが十二使徒を従えてエルサレムに入城し、キリストが割腹するように十字架につくのである。牧歌的な風情で福音を奏でるキリスト（イエス）では大衆を関心を引けないからである。また教団のイメージも払拭できない。ここでモデルのキリストの登場するのである。このキリストが旧約の奇跡を凌駕する痛快な奇跡で人々を救い、偽善な律法学者やパリサイ人を退治し、死後三日のうちに復活を遂げるといふ離れ業をやったのけるといふ設定を組むことで大

衆の心をつかみ、その後教会の信仰に誘う戦略である。

彼らが断腸の思いでいたことは次の件から読み取れる。

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨みむねを行う者だけが、はいるのである。

その日には、多くの者が、『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって予言をしたではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき、わたしは彼らにはつきり、こう言おう、「あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ」。マタイ7：

21 - 23

キリストの教えを守って死んだのに当人から知らないと言われたのでは身も蓋もない。だれが聞いても理不尽な話である。これは福音書を『忠臣蔵』のような「劇」と一緒にされないための理なのである。聖典を「芝居」と一緒にされては堪らない。ここで活きるのがイエスの言葉なのである。いくつか取り上げてみる。

『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていることは、あなたがたの聞いていることである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。マタイ5：43 - 44

人をさばくな。自分がさばかれないためである。

あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。マタイ7：

1 - 2

求めよ、そうすれば、与えられるであろう。

捜せ、そうすれば、見いだすであろう。

門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。

すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけても
らえるからである。マタイ7：7 - 8

狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そし
て、そこからはいつて行く者が多い。マタイ7：13 - 14

以上の言葉はQ資料（福音書の元となったイエスの言行録）にも載
っていることからイエスの言葉とみて間違いない（だからといって
Q資料のすべての言葉がそうとはいえない）。イエスの個性がよく
表れている。「迫害する者のために祈れ」という言葉はキリストの
金言とされる教えでイエスによって打ち出された思想である。これ
らの言葉を読んで作り物と思う者が居るだろうか。ほとぼしるよう
な凄まじい才能がみとれる。このようなイエスの真言を随所に記
すことで劇と区別しているのである。

以上の考察から、なぜ、

テーゼ イエスは言われたキリストだった

アンチテーゼ イエスは言われたキリストだったわけではない

という定理が成り立つのか掴めてきたのではなからうか。

では、なぜ「イエスは言われたキリストだったわけではない、ゆ
えに、わたしたちのキリストだった」という止揚に至るのだろうか。
だがまだ受難を解く作業が残っている。キリストに至る道はおそろ
しく険しく苦難に満ちている。この象徴が「受難」である。

受難 1 逮捕まで

物事には順序があるので受難から始めるわけには行かない。そこで区切れのよいエルサレム入城から取り組むことにする。

ガリラヤからエルサレムまでは二日弱の距離といわれている。イエスが、いつ旅立ち、どの経路を辿ったかは不明である。共観福音書は、まずユダヤとヨルダンの東側の土地およびペレアでの宣教活動について述べ、その後しばらくしてから過越の祭を守るために仲間を連れてエリコ経由でエルサレムに入ったと記している。一方、ヨハネはペレアでの滞在を六ヶ月以上としている。

イエスがエルサレムに入城した日も不明である。福音書は入城後から過越の祭までの間に数日おき、律法学者と討論したり、神殿で教えを宣べていたと記している。この話を信じると過越の祭以前に上京していたことになる。

過越の祭は毎年ユダヤ暦のニサン（西洋暦では3月から4月）の15日に祝われるユダヤの三大祭のひとつである。14日の日没前に犠牲獣をほおり、日没（15日）から祭りが始まる。福音書は処刑された日を「過越の準備の日」としている。準備の日ということは14日（金曜日）となるが、この話はほんとうだろうか。

「神殿の清め」とされる「王の柱廊」の事件は言動からみて確信犯だったことは間違いない。事件の大きさから判断すると、「最後の晩餐」が執り行われた14日（金曜日）の夕方に起きたとみるのが自然である。

正典の四つの福音書はエルサレム入城の場面をゼカリア書の次の予

言（ゼカリヤ書9：9）を脚色して描いている。

さて、彼らがエルサレムに近づき、オリブ山に沿ったベテパゲ、ベタニアの付近にきたとき、イエスはふたりの弟子をつかわして言われた、「むこうの村へ行きなさい。そこにはいるとすぐ、まだだれも乗ったことのないろばの子が、つないであるのを見るだろう。それを解いて引いてきなさい。もし、だれかがあなたがたに、なぜそんなことをするのかと言ったなら、主がお入り用なのです。またすぐ、ここへ返してください」と言いなさい」。そこで、彼らは出かけて行き、そして表通りの戸口に、ろばの子がつかないであることを見たので、それを解いた。すると、そこに立っている人々が言った、「そのろばの子を解いて、どうするのか」。弟子たちは、イエスが言われたとおり彼らに話したので、ゆるしてくれた。そこで、弟子たちは、そのろばの子をイエスのところに引いてきて、自分たちの上着を道に敷き、また他の人々は葉のついた枝を野原から切ってきて敷いた。そして、前に行く者も、あとに従う者も共に叫びつづけた、「ホサナ、主の御名みなによってきたる者に、祝福あれ。今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。こうしてイエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてのものを見まわった後、もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニアに出て行かれた。マルコ11：1-11

この話は創作である。「だれも乗ったことのないろばの子」から幼い子ロバと想像できる。ロバは馬に比べると小柄なことから人間が跨っている姿を見ると見慣れない者にとっては不憫に映る。それを大の大人が子ロバに乗って公道を進んでいたというのだから異様な光景を想像せざるを得ない。これでは駄馬のロシナンテに乗って風車に向かって突撃するドン・キホーテと変わらないだろう。むろんサンチヨ・パンサが使徒である。このような真似をすれば、失笑か、眉をしかめられるのがオチである。示し合わせて置かなければこの

ような大歓迎が起こるはずがない。見知らぬ者に口バの子を渡す物好きが居るとも思えない。

ル力はさすがにやり過ぎと思ったのか別の予言を引用してこの場面を描いている。このイエスがモデルのキリストであることは言うまでもないだろう。これでは予言の成就を果たすマシンである。「時が遅くなっていた」という句とこの直後に起こる「神殿の清め」の事件とは強い因果関係が認められる。「遅くなっていた」のは「遅くなつてからきた」とも採れる。イエスが確信犯であることを忘れてはならない。なぜこの時刻を選んだのだろうか。ここにこの謎を解くカギがある。

過越の祭は数十万人ものユダヤ人が内外から大挙してエルサレムに殺到する特別な祭りだった。宿がとれずに野宿する者が多かったといわれている。城門の外には多くのテントが張られていたはずである。「神域の外壁の広さは、南側279m、北側310m、東側465m、西側480mで、全体の広さは約14万?である」(『図説新約聖書の考古学』/関谷定夫著/講談社)。「城門が主要なものが七つか八つあった。東側の金の門は神殿に直接通じていたが、現在ではふさがれている。その南には泉の門が開いていて、南側には糞の門、あるいは瀬戸かけの門があり、西側に北西角の隅の門、その南にエフライムの門、北側に魚の門があった」(『聖書時代の日常生活』/左近義慈・南部泰孝著/創元社)。神殿はまだ建設中だった。着工から40年以上経っても竣工していなかったのである(紀元62年完成)。建設には一万人以上の労働者が関わったといわれている。

イエスが暴動を起こした「王の柱廊」は城門の南側に在った。この「王の柱廊」についてD・ロブスは次のように記している。「囲壁に沿い柱廊、雨や太陽をよける歩廊がつづいていた。柱は普通十一

メートルの高さがあつた」。『王の柱廊』は三つの身廊からなり、その中央のものは二十八メートルの高さがあり、その柱身は、ヨセフスによれば『三人の男が取り囲むことのできない』ほど巨大であり、そのコリント風の彫刻はその着想のギリシャ芸術にふさわしいものであつた』（『イエス時代の日常生活？』ノダニエル・ロブス著／並木居斉二・並木居純一訳／山本書店）。

この「王の柱廊」の一角で両替業や犠牲獣の売買が営まれていた。イエスは城門の前に多数あるミクヴェー（沐浴場）のひとつで身を清めると城門を潜つて足早に「王の柱廊」に向かつたにちがいない。そしてそこに居た無実の人々に向かつて狼藉を働いたのである。彼らを追い出し、台や腰掛をひっくり返した拳句、彼らを強盗と罵つてそこを占拠したのである。ヨハネは「なわでむちを造つて」（ヨハネ2：15）と記している。もっと烈しく暴れた可能性がある。こんなことが許されてよいのだろうか。むしろキリストであっても許されるわけがない。またこの事件の前に口バの子に乗って周囲の気を引く真似をするだろうか。この後に数日間も気ままに過ごせるわけがないだろう。以上の点からエルサレム入城の日とこの事件の日は同じ日とみるのが自然なのである。

教会はこの事件を「宮清めの事件」として賛美している。まるで神殿で商売することが汚らわしいことのように扱っている。仮にそうであつたとしても暴力をふるう必要はないだろう。これまでどおり自分の考えを述べればよいのである。しかしこれをせず強硬手段に出ている。これは明らかにそれまでのスタイルと違っている。この点を無視して美化するのはヘンである。ではこの強硬手段はなにを意味しているのだろうか。ヨハネがこの直後に答えを記している。

そこで、ユダヤ人たちはイエスに言った、「こんなことをするから

には、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。

イエスは彼らに答えて言われた、

「この神殿を壊したら、わたしは三日のち、それを起こすだろう」。
ヨハネ2：18-19

つまり復活する前に神殿を壊すつもりでいたのである。このイエスの言葉を文節で区切ると、「この神殿を壊したら」、「わたしは三日のちに」、「それを起こすだろう」となり、「それを起こすだろう」という句の「それ（指示語）」は「壊された神殿」を指している。「キリストが壊し、キリストが起こす」ことを表しているのだが、イエスが壊すことには変わらない。だが「壊したら」という条件付きとも現在進行形とも採れる言葉からまだ「壊していない」ことが分かる。では如何にして壊そうとしているのだろうか。

ここで重要となるのが『忠臣蔵』的な見方を捨てることである。「忠臣蔵」は吉良上野介を「悪」と設定した「劇」である。劇であれば逆の設定も可能である。「赤穂浪士」を悪として描けば吉良がヒーローとなる。「イエスの事件」も同じである。イエスを善とし、ユダヤ当局を悪と決め付けて掛かるのであれば劇と変わらない。ユダヤ当局がイエスを捕まえることは悪だろうか。強盗呼ばわりされた被害者たちは当局の黙認のうえで商売していたのである。かれらの身になれば神殿を穢しているのはどっちだという話になるだろう。また文句があるのなら当局に言うのが筋である。カヤパ（大祭司）はローマの傀儡の頼りにならない大祭司であったが「油を注がれる者」という意味においてはキリストと同格である。ガリラヤの民間人からとやかく言われる存在ではないのである。大事な大祭が近づいている。カヤパがこの事件に対して断固たる措置をとるのは当然である。

このように捉えると夕暮れ時を狙った意図も読める。この事件が14日（金曜日）の夕方起きたとすると、神殿にはほとんど人が居なかったはずである。日没前に過越の犠牲獣を神に捧げなければならぬ。店仕舞いを始めた頃にイエスの襲撃に遭ったのではなからうか。女性が悲鳴をあげ、逃げ惑う人々の様子が思い浮かぶ。そして呆然として佇む使徒たちの姿が目には浮ぶようである。

ここで注目すべきことはローマの存在である。過越の祭の際はよく暴動が起きていた。民族意識の高揚が過激な行動に走らせていたのである。これを取り締まるためにユダヤ地方総督がローマの守備隊を率いてカイサリアから乗り込んできていた。このピラトが神域の北西隅にあるアントニアの要塞で警戒の目を光らせていたのである。ピラトがこの事件に反応を示さないことは考えられない。

このような状況で事件を起したとなると、考えられるその後の展開はふたつしかない。この場で捕まったか、逃げたか、のいずれかである。これは犯罪なのである。犯罪である以上罪を負うのは当然である。福音書は民衆がイエスを支持していたので捕まえられなかったと記している。だが大事な祭りを穢す者に民衆が心を寄せるはずがない。この場で捕まったのならその後の「最後の晩餐」や「ゲンセマネの逮捕」はなかったことになる。逃げたのなら違ったかたちで行われたはずである。捕まるつもりでいたのであればこの時間帯を選ぶ必要がない。神殿護衛長がどこに居たかは不明だが知らせに行くには時間が掛かる。ピラトもやたらに強権をふるうとユダヤ人の気持ちを損ねることから当面は当局の出方を窺う安全策を採るにちがいない。夕暮れから夜にかけての闇もイエスに味方するだろう。14日の日没前にこの事件を起したとみるのが妥当である。

ではこの後の展開はどうなるのだろうか。福音書は、

- ・最後の晩餐
- ・ユダの裏切り
- ・オリーブ山へ移動
- ・ゲツセマネでの逮捕
- ・裁判1 カヤパ（大祭司）の私邸での裁判
- ・裁判2 ピラトの尋問
- ・処刑

の順で事が運んだとしている。

マルコは、イエスは朝の9時ごろに磔にされたと記している（マルコ15：25）。これに対して、ヨハネは正午ごろとしている（ヨハネ19：14）。神殿での事件が夕方起きたとすると、以上の表のすべてのが半日強の間で行われたことになる。この間に裁判が二度行われている。「最後の晩餐」から「ゲツセマネの逮捕」までの時間的余裕はほとんどなかったと捉えなければならぬだろう。では「最期の晩餐」は作り話なのだろうか。まずはこの問題から取り組むことにする。

神殿での事件は計画的な犯行の要素が強い。この事件を計画していたのであれば最期まで計画を立てていたとみるのが自然である。事実、ヨハネを読むとイエスは何度も上京している。この上京は下見も兼ねた巡礼であったはずである。ピラトやカヤパの容姿や性格をつかまなければならず、神殿で事件を起した後の措置も講じて置かなければ事に臨めないからである。この見方に立つと「最後の晩餐」の前のくだりが重要な意味をもってくる。

イエスは言われた、「市内にはいり、かねて話してある人の所に行つて言いなさい、『先生が、わたしの時が近づいた、あなたの家で弟子たちと一緒に過越を守ろうと、言っておられます』」。マタイ

「かねて話してある」という言葉から取り決めがあつたことが分かる。その取り決めはその家で「最後の晩餐」が行われていることから場所の提供だったことが分かる。「市内にはいり」という言葉も重要である。この言葉はその家の場所を示している。市内の何処のどの家かは不明だが捕まらない場所に在ったことはたしかである。イスラエルに行ったとき「最期の晩餐」が行われた家というのに連れて行かれたのだが、旧市街の一角に在るその家では捕まっていたにちがいない。イエスを含めた13人も男（もつと多数だったという説もある）が血相変えて逃げ込むには立地条件が悪く、なによりも狭すぎて無理がある。すでに市内に居るのに、なぜ「市内にはいり」という言葉を使っているのだろうか。このことは遠くへ逃げていたイエスたちがエルサレムに舞い戻ってきたことを意味しているのではなからうか。このように捉えると辻褄が合う。

「最期の晩餐」は出エジプト記の次のくんだりと酷似している。

モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います」。そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエル十二部族に従つて十二の柱を建て、イスラエルの人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭^{はん}をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。その時モーセはその血の半ばを祭壇に注ぎかけた。そして契約の書を取つて、これを民に読んで聞かせた。すると、彼らは答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」。そこでモーセはその血を取つて、民に注ぎかけ、そして言った、「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基づいて、あなたがたと結ばれる契約の血である」。出エジプト記24:3-8

これに対して「最後の晩餐」は次のように記されている。

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである」。

また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。これは、罪ゆるしを得させるためにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。

あなたがたに言うておく。わたしの父の国でああなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、ぶどうの実から造つたものを飲むことをしない」。マタイ26：26 - 29

十二部族に対して十二使徒、祭壇に対して過越しの祭、主（神）との契約の血に対してわたし（イエス）との契約の血といった類似点が見られる。だがこれは明らかに脚色である。使徒たちがパニツクに陥っていたことに疑いの余地がないからである。神殿での事件はまさに江戸城の本丸御殿の松の廊下で刃傷沙汰を起すような大事件^のである。イエスと共に居り、一緒に逃げたのであれば共犯とみられているにちがいない。怒りを露にする使徒も居たはずである。途方に暮れて泣き出す使徒も居たと思う。ここでユダの裏切りが起るとされているのだが、この裏切りはその前の裏切り工作を前提としている。事前に知っていたのであればついてくるはずがなく、工作の段階で訴えていたはずである。あらぬ嫌疑をかけられたり、一緒に逃げ回る理由がどこにあるのだろうか。ここでのユダの裏切りは理屈に合わない。この時点でユダの裏切りが無くなると、必然的にゲッセマネの逮捕もなくなる。ではユダの裏切りはなにを意味しているのだろうか。この件は後述するので省くことにする。

改めて聖餐である。

聖餐の席でのイエスの言葉は「旧約」と「新約」を意味している。

明確に意識していたかは不明だが、この「新しい契約」は復活の前の「神殿を壊す」試みの一貫としてやらねばならなかったようである。このように捉えないとこの家の家主との話し合いの意図も、前後の脈絡も破綻する。「最後の晩餐」は作り話ではなく実話なのである。私は使徒たちに自首することを約束した後、別れの誓いというかたちで行われたと推理する。このように解釈しないとこの場が収まらないし、聖餐が行えないからである。

イエスはこの後に使徒たちをオリブ山へ導いたのだと思う。神殿が一望できるこの山の上で使徒たちに別れを告げ、独りで出頭しても「見捨てられる」という予言は成就する。キリストはなんびとも巻き添えにすることなく独りで受難の扉を開かねばならない。このことはイザヤ書五三章に示されているとおりである。密告者も無く、ゲッセマネでの逮捕もなくなるとどこで逮捕されたのだろうか。別の場所で逮捕されたという話も聞かないとなると、残された道は出頭以外にはないのである。

以上が受難までの経緯である。

受難 2 裁判

イエスの裁判は不当な裁判だったのだろうか。

この見方が主流である。たとえばヨセフスは次のように記している。たとえいかにひどい犯罪を犯した人間でも、最高評議会が死刑を宣告しない前に殺すことを、律法ははっきりと禁じている。ユダヤ古代史 16・9・3

だがイエスはカヤパの私邸で裁かれ、ピラトに引き渡された後に処刑されている。(マタイ 26:57)

またタルムードの『サンヘドリン』の篇には次のような条項が記されているという。

・安息日、祭日、それに属する準備の日の裁判は禁止されている
サンヘドリン? 1h)

・ユダヤの訴訟手続きによると、日中のみ裁判が許された(サンヘドリン? 2b)

・裁判は公開裁判でなければならなかった(ベト・ディン、サンヘドリン? 2b)

『法律家の見たイエスの裁判』/ W・フリツケ著/ 西義之訳/ 山本書店

だがイエスの裁判ではこの決まがことごとく破られている。

しかしながら不当な裁判の根拠は福音書が元になっている。福音書は処刑された日を祭りの準備の日(ヨハネ 19:31)としている

が、この日でないことはこれまでの考察から明らかである。このことは別の観点からも指摘できる。たとえば、福音書には、

「多くの偽証者が出てきたが、証拠があがらなかった」(マタイ26:60)

と記されている。ところがヨセフスは、

偽証したと認められた者には、有罪判決を受けたならば、その偽証によって(被告に)科せられるはずのと同じ処罰が科せられねばならない。ユダヤ古代史4・8・15、申命記19:15

旧約の神は同態復讐法を説く神である。ヨセフスの記事はこの戒めに即している。偽証は神への宣誓を裏切る背信行為である。にもかかわらず、福音書は偽証者が多く出たという。ではその偽証者たちは処罰されたのだろうか。イエスの処刑のとき一緒に処罰されたのはバラバという政治犯らしき男と名の知れない罪人だけである。そして従来の14日説は次の件によって崩壊する。

そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。

彼らはイエスを引き取った。

イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ(ヘブル後でゴルゴダ)という場所に出て行かれた。ヨハネ19:16-17

この日が14日である。死刑執行にはローマの承認を必要とした。十字架刑はローマの極刑である。ユダヤの処刑方法は、石打ちの刑、火刑(犯罪者の口に燃える松明をさしこんで窒息死させる)、斬首刑、絞首刑の四つである。したがってピラトが十字架につけさせるためにイエスを渡すことはなく、またユダヤ当局も受け取るは

ずがない。だがイエスは十字架に磔にされたという。このことはピラトがイエスの身柄を当局に返さなかったことを意味している。この引渡しが無くなる、14日の処刑も、15日の朝9時ごろの処刑も宙に浮くことになる。

要は福音書のメリットのために14日としているのである。「過越の無垢の子（生贄）」という標語と「かれは暴虐の裁きによって取り去られた」（イザヤ書53：8）という予言を満たすためには14日でなければ困るからである。この14日とする無理な試みが処刑の場面を茶番と化している。たとえば、

彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、その着物を分け、

そこにすわってイエスの番をしていた。マタイ26：35 - 36

このくだりは詩篇の次のくだりが元になっている。

まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。詩篇22：16

彼らは互いにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きする。

詩篇22：18

そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって、言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。マタイ26：39 - 40

このくだりは同じく詩篇の、

わたしを見る人はみな、わたしを嘲笑い、唇を突き出し、頭を振る。
「主に頼んで救ってもらうがよい。主が愛しておられるなら、助け
てくださるだろう」。詩篇22：8-9

このくだりが元になっている。そして、

三時ごろに、イエスは大声で叫んで、

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。それは「わが神、
わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味
である。マタイ27：45-46

この最期の言葉も、

わが神、わが神、

なにゆえにわたしを捨てられたのですか。詩篇21：1

という詩篇のくだりが元になっているというようにほとんどが詩篇
のコピーに過ぎない。ローマの憲兵に殴られ、罵られる件はイザヤ
書五三章が元になっている。このような次第でこの話を信じるとい
うのは無理である。これではローマの憲兵もその場に居た人々も予
言の成就のためにマインドコントロールされた人形と変わらない。

ここで「神殿を壊す」という言葉を思い出してほしい。神殿を壊す
最初の試みは「王の柱廊」での暴動だった。イエスはこの事件で名
実共に犯罪者となった。この事件で「罪人として処刑される」とい
う予言の成就の布石を敷くことに成功したのである。そして「最後
の晩餐」を執り行うことで神殿を起こした後の措置にも成功した。
壊した後の展開にも気を配らなければ再建することができないから
である。だとするとまだ壊す作業が残っている。「剣を持つ者は剣
で滅びる」というのがイエスの信念である。剣を持って滅びてしま

ったのでは復活できない。ならば言論で壊す以外に道がないだろう。この神殿を壊す言論の場が「裁判」だったのである。

「不当な裁判」は神殿ではなくイエスの計画の崩壊を意味する。なにも言えずに処刑されてしまったのでは犬死と変わらない。律法は、安息日、祭日、それに属する準備の日を裁判を禁じている。祭りの前日（準備の日、14日の夕方）に事件を起せば裁判を受けずに済む。イエスはこれを実行した。14日の夜半から15日の未明にかけて出頭したとみるのも無闇に時を稼ぐ必要がないからである。イエスは、当局が祭りの期間中に裁判を開かないことを確信して事に臨んでいたのである。

ところで不当な裁判は当局になんのメリットがあるのだろうか。すでに犯人は捕まっているのである。律法を犯すことは犯罪である。なぜ必要もないのに律法を犯す必要があるのだろうか。イエスは使徒たちの無実を説明してくれたにちがいない。巻き添えを許さないのが受難の鉄則である。過越の祭はユダヤの由緒ある大祭である。大祭司の権威がもつとも輝く時である。この国家の一大行事を脅かす事態はすでに回避している。不当な裁判をする理由がどこにあるだろうか。

両者の思惑が一致しているのであれば不当な裁判が起こる理由がない。これを望んでいるのは教会だけである。だが教会の力が及ぶ時代ではなかった。ならば正当な裁判が行われたとしか考えようがない。過越の祭は一周間続く祭りである。したがってイエスはこの間の七日間は生きていたにちがいない。

ここでひとつの素朴な疑問が起こる。なぜ処刑されたのかという疑問である。福音書は「神殿を壊して三日後に建てることができる」（マタイ26：61）という言葉を罪状に挙げているが、「不敬罪

「死刑」という見方には疑問が残る。イエスと似た例をヨセフスが記している。

時は遙かに下って紀元66年のことである（第一次ユダヤ戦争の四年前）。イエスと同名のアナニアの子イエスという「どこにでもいる田舎者」が、ユダヤの三大祭のひとつである仮庵の祭のとき、突然神殿の中に現れてエルサレムと神殿を罵る呪いの言葉を大声で叫びはじめたという。このイエスはこれだけでは止まらず、日夜路地という路地を徘徊しては不敬の言葉を叫び続けたという。結局市民の訴えで捕まる運びとなり、シコタマ鞭で打たれたという。だがその際も、弁解せず、許しも請わずに不敬の言葉を大声で叫び続けていたという。悪魔の仕業と受け取った当局はかれをローマの総督の前に引き出した。そしてまた鞭で烈しく懲らしめられたが同じ有様だったという。時のユダヤ総督はアルビノスという人物だった。このアルビノスが直接尋問に当たった。結果「気が狂っている」と判断したアルビノスはこのイエスを放免したという。（『ユダヤ戦記』³ / フラウイウス・ヨセフス著 / 秦剛平訳 / 山本書店）

神殿での事件以外はイエスの事件と変わらない。構図もほとんど同じである。精神鑑定の結果が死の明暗を分けたに過ぎない。この例は不敬罪であつても死刑とは限らない傍証である。特殊な例にせよ参考になる。不敬罪が死罪の理由と決め付けてかかるのは危険である。また過越の祭がユダヤ人にとってどれほど大切な祭りであるか知っていたイエスが祭りの最中（三日後）に復活すると言つたろうか。他の理由の影が浮かび上がってくる。

ここで裁判での次の場面を思い出してほしい。

大祭司は再び聞きただして言った、「あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか」。

イエスは言われた、「わたしがそれである」。マルコ14:61
- 62

仮に否定したのであれば、なぜ裁かれたのだろうか。キリストを自称する者は他にも居たのである。勝手にキリストと思われる者も居たし、バル・コホバのように頭に油を注がれて正式にキリストと認められる者も居た（第二次ユダヤ戦争で戦死）。だがこれらのキリストが裁かれたという話を聞いたことがない。自称する者が裁かれないのだとしたら、どうして否定する者が裁かれるのだろうか。「わたしがそれである」と答えたから裁かれたにちがいないのである。

キリストを自称する者は居たが、裁判の席で公言する者は居なかったからである。この一言で神殿にひびが入ったのである。この言葉を聞いて、カヤパは自分の衣を引き裂いて怒りを露にしたというのがこれは脚色である。この言葉は「わたしが神である」というのに等しい。当然大サンヘドリン（最高評議会）は騒然となったにちがいないのである。

黙っていたのでは神殿を壊すことができない。イエスは神殿を壊すために堂々と持論を論じたにちがいない。マタイ二十三章にまとめられた律法学者とパリサイ人非難はこの場で行われたはずである。宣教の合間に陰口を叩くように非難しても仕方がない。ダビデ子孫説の誤りを述べたのもこの場だったと思う。専門家（律法学者）に言わなければ意味がない。イエスほどの男が神殿を壊すために命を懸けて話していたとなると、サンヘドリンのメンバーと聴衆はまるで羊の群れに突然虎が躍り出たような脅威を感じていたにちがいない。

使徒たちは連行されてこの場に着かされていた。彼ら抜き裁判は不当である。このことは有名なペテロの否認からも読み取れるし、

使徒行伝からも窺える。目を疑るような光景に唾然とする使徒たちの姿が目に見え。別人としか思えないイエスがキリストを名乗って静かにキリストの威厳をみせていたからである。むしろユダも使徒のひとりとして列席していた。

ユダヤ人は同朋を殺すことを好まない民族といわれている。神が与えた同胞の命を奪うことにためらいを覚えるのが理由のようである。もともと聖書はイスラエルの同胞愛を育むために編まれたような書である。民族意識もこのあらわれであり、一神教の概念もこれに根ざしている。イスラエルはいまでも強制収容所で殺された同胞の身元を調べているといわれている。分かるはずがないという議論は当て嵌まらない。一人でも多く供養してあげたいという一念^{おもい}でいることだからである。イスラエルで拉致問題が起こればイスラエルはけっして黙ってははいないだろう。「一人」であつても国民が一丸となつて立ち上がるにちがいない。この思いは古代ユダヤでも同じであつた。これを象徴しているのがイエスである。イエスとて時代と環境からは逃れることができない。この環境はユダヤ当局が象徴している。神が不当な裁判を許さないのにどうしていまより信心深かつたはずのユダヤ人が不当な裁判を開いたりするのだろうか。

改めてイエスはなぜ処刑されたのだろうか。死罪にする罪状が見当たらないようにみえる。福音書も証拠が挙がらなかった記している（マタイ26：60）。だが、神殿で暴れ、律法学者たちを公然と糾弾し、キリストと自認して憚らない者を放免するわけには行かないだろう。まさに虎を野に放すようなものである。審議は紛糾したにちがいない。

ここでユダが登場するのである。使徒たちは証言台に立つて証言しただけである。神殿での事件とは無関係であることを主張したほか、イエスを弁護したはずである。だがユダだけが違つていたのである。

政治的な要素が強かったと主張したにちがいない。政治犯となればピラトが関心を示すからである。事実イエスは「ユダヤ人の王」として処刑されている。ローマにおいて十字架刑は「政治犯」に処す刑だったのである。

これはイエスの予定通りの展開だったはずである。讒言を期待して使徒たちを使徒に選んでいたからである。議会が紛糾し、十字架につけられることを予知していたにちがいない。この裁判の様子を脚色したのが「最後の晩餐」である。

「あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切るうとしている」「マタイ26:21

証言台に立ったときの使徒たちの思いはまさにイエスにこのように言われているような心境だったにちがいない。この状況に過敏に反応したのがユダだったのである。なぜ裏切ったのか。このような性格の持ち主だったとしか説明のしようがないだろう。賄賂をもらったかは不明である。だが「裏切った」ことには変わりがない。ゆえに福音書は「裏切り者」と明記しているのである。このユダの裏切りによって「裏切られる」という予言は成就したのである。われわれはユダが裏切ったことを知っている。

すでに述べたように、政治犯ということになればピラトの対応も変わってくる。ピラトは大国ローマの地方総督であり、ユダヤの最高責任者である。さらにユダヤ人を憎悪し、蔑視することにかけては前任者たちの比でなかったといわれている（紀元36年に更迭されている）。アナニアの子イエスのときのアルビノスのようなわけには行かないだろう。福音書はローマを意識してピラトを脚色している。

ピラトがイエスを政治犯とみなしたことは「ユダヤ人の王」という掛札を十字架の頭上に掲げたことから察しがつく。イエスはピラトの前でも臆することなく持論を主張したにちがいない。ヨハネの福音書にその様子が描かれている。この態度がピラトの癪に障ったのだろう。キリストの影響力は甚大である。このキリストを自認し、改める気のない政治犯を生かしておくわけには行かない。結果十字架刑と決まったのである。

いよいよ受難のラストの処刑である。

受難の封印を解くひとつのキーワードが次のくだりである。

さて、すでの夕がたになったが、その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、アロマタヤのヨセフが大胆にもピラトの所へ行き、イエスのからだの引き取りを願った。彼は地位の高い議員であつて、彼自身、神の国を待ち望んでいる人であつた。マルコ15：42 - 43

日にちの問題は省くとして、なぜこのヨセフは遺体の引渡しを願ったのだらうか。安息日の前という理由はもはや理由にならない。わざわざ「ユダヤ人の王」という札を掛けさせたピラトが容易にこの願いを受け入れるとも思えない。賄賂だらうか。むろんありえないことではないが、この推理はピラトがヨセフに会ったことを前提とした二重の推理である。

メル・ギブソンの『パッション』は受難を扱った映画として知られている。イエスがみるも無残にぶちのめされる映画として有名である。私もみせてもらったが、「ああいうふうに死ねたらイエスも幸せだったらうに」というのが素直な感想である。十字架刑の目的は罪人を痛めつけることにあつたわけではないからである。ヨセフスは次のように記している。

彼らは捕えられると、刑罰の恐怖から抵抗した。しかし抵抗した後で命乞いしても手遅れだった。彼らはまず鞭打たれ、ありとあらゆる拷問にかけられ、最期に城門に向いあわされ、十字架にかけられ、殺された。ユダヤ戦記5・11・1

これを読むと悲惨な状況が窺える。だがこれは戦時中の見せしめであって本来の目的とは違うのである。

この分野の偉大な碩学がマルティン・ヘンゲルである。この碩学が残した『十字架―その歴史的探求』（マルティン・ヘンゲル著／土岐正策・土岐健治訳／ヨルダン社）なくしてこの問題は語れない。私自身この書から多くを負っている。ヘンゲル氏はこの書の「まとめ」の章で次のようなことを記している。

二 磔刑は終始政治的軍事的な刑罰であり続けた。ペルシア人とカルタゴ人のもとでは、それはまず第一に、高官、指揮官、あるいは叛徒に対する刑罰であったのに対して、ローマ人のもとではそれはとりわけ下層民、すなわち、奴隷、暴力犯、および反乱を起こした属州民、なかならずユダヤ州の不穏分子に対する刑罰だった。

六 磔刑の非人間性は、しばしば犠牲者を埋葬しないことによって最高度に達する。磔刑に処せられた者が野獣や猛禽類のえじきとされる、というのがおきまりのやり方だった。犯罪者のはずかしめはこれによって頂点に達する。埋葬されないことが古代の人間にとつてどれほど不名誉なことであったかは、ほとんど現代人の想像し得ざるところである。

つまり十字架刑の目的は痛めつけることではなく遺体を辱めることであつたのである。極限の苦痛に耐え忍んで死ねる者は英雄である。

そしてその勇姿は人々の心に残る。メル・ギブソン氏の映画もこの効果を狙ったものにちがいない。ところが英雄的に死んでもその遺体を外に放置されるとどうなるのだろうか。二時間ほどで死後硬直が始まる。ほぼ十二時間程度で完成するが、この間に死肉に飢えた鳥、ハエといった連中が寄ってくる。ハエが集れば当然ウジがわく。ウジはすぐにその貪欲な本性をあらわすにちがいない。その結果猛烈な異臭が漂いだすことになる。体内の汚物も垂れ流しといった観るも無残な光景が展開されるのである。特に女性には耐え難いのはなかるうか。美貌を謳われたクレオパトラが磔にされてこの有様となれば生前の面影は消し飛ぶにちがいない。映画にすれば客が嘔吐をもよおす凄惨なものとなるだろう。死後の名声を砕き、奪うことにこの刑の狙いがあったのである。イエスだけが例外を認められるだろうか。ユダヤ人の中にはこの例外を好まない者も居るだろう。福音書は見え透いた物語で封印している。放置されていた事実を隠して起きたかったからではなかるうか。当時の民衆は皆十字架の事情を知っているのである。イメージとしては最悪である。ここでモデルのキリストが登場する。イエスは十字架刑となることを知っていたはずである。このことはこれまで述べてきたとおりである。ならばこの恥辱も受け入れる覚悟で受難に臨み、磔にされた死んだにちがいない。なぜこのようなことをしたのだろうか。この謎が最大の謎であり、「わたしたちのキリスト」であるカギなのだが、この問題は「真理」で解かなければ無理なので省くことにする。

以上が受難のすべてである。

エピソード

今回も不評のようである。日本に居る限りどのような書き方をしても結果は同じである。受け入れる土壌がなければ芽が出るはずがない。

だが外国は違っている。

特にヨーロッパにはキリスト教を国教とする国が多い。キリスト教が国の宗教として国民と密接に結びついている。当然のことながらイエスの認識や評価も日本とは違っている。

戦国時代に、「地球が丸い」ことに関心をもったのは信長だけだったようである。他の者にとっては、地球が丸かろうと、三角だろうと、どうでもよかったのである。「地球が丸い」ことを知ったからといって戦に勝てるわけではないし、この事実の活かし方も知らないことから関心の持ちようがなかったからにちがいない。

「罪人として処刑されるといふ予言を成就させたのであれば受動的な解釈はありえない」と言ったときの日本人の反応は戦国時代の信長以外の者の反応に似ている。反応がないのである。ところが外国人の神父や外国人の青年に話すと表情が一変する。目つきが変わり、異様な緊張感を示すのが常である。

日本と欧米の違いはコインの表と裏のようである。日本ではびた一文にもならないこの主題が欧米では桁違いの額に跳ね上がる。イエスの謎を解いた書となれば一兆は下らないのではなからうか。

「イエスは予言されたキリストではなかった、ゆえに、わたしたちのキリストだった」ことを証明する最終的な取り組みは「真理の探

究」である。イエスが見いだしていた真理が解れば因習分解を解くように解明できる。要するにイエスは見いだした真理の「体現」をしたのである。この意味において「言は肉ことばとなり、わたしたちのうちに宿った」(ヨハネ1:14)という福音書の解釈は正しい。だが私のいう真理は「真理の真理論」とは別である。真理の定義を知っていることと真理を見いだすことは同じレベルの試みではない。音楽でたとえるとレコードコピーをするようなものである。

このことは神の問題でも同じである。キリストを「神の子」とするのであれば神を知らなければ話にならない。神の問題はある意味では単純である。出エジプト記の次のくだりに神の命題が記されている。

モーセは神に言った、「わたしがイスラエルの人々のところへ行つて、彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわたしに聞くんらば、なんと答えましょうか」。神はモーセに言われた、「わたしは、有つて有る者」。また言われた、「イスラエルの人々にこう言いなさい。『わたしは有る』というがたが、わたしをあなたがたのところにつかわされました」と。出エジプト記 3:13-14

神はモーセに「わたしは有る」というものだと言っている。ユダヤ人はこの問題について考えないのだろうか。私は未だにこの問題を扱ったユダヤ人の本を読んだことがない。学者も神の名とされる「YHWH」の読み方ばかりに囚われていて「わたしは有る」の意味には無関心のようにである。

幸い私は解けたので「神」を知っていると思つている。誤解がないように言うと、あくまでも「人格神」という意味での理解である。

日本のカミは人格神ではないので聖書の神とは別である。

いまの私には「全知全能」とか「創造神」といった認識はライオンの容姿を知らずにライオンのことを「百獣の王」と形容しているように映る。ライオンが「百獣の王」かどうかは不明である。トラの方が強いかもしれないし（おそらくアムールトラの方が強いだろう）、海に入ればシャチの方が強いにちがいない。なぜ一足飛びに「全知全能」という結論に至るのだろうか。全知全能という解釈はあくまでも「大前提」であってこの仮定の証明なしの結論は不当である。

言葉は「一つ概念」に帰納するという学説を読んだことがある。ヘーゲルは弁証法の最終局面は神に至ると説いている。これらの学説は正しい。動物（心をもつ生物）は「その概念」なしには「存在できない」という意味においてわれわれの同類である。「わたしは有る」、これが神であることを思い出してほしい。神は「わたしは有る」を換言した言葉であり、「わたしは有る」はその語を換言した言葉に過ぎないのがカラクリである。要するに「わたしは有る」の意味を解けばよいのである。そうすれば自ずと「全知全能」の問題も解けるといふ仕組みとなっている。他に解く方法が有るだろうか。

福音書を読むとイエスも「神」を知っていたことが分かる。ゆえにイエスの問題は弁証法で解かなければならないのである。この二千年間にこの試みをした者は居ないようである。イエスのたとえ話を真理と語っているようでは話にならない。たとえ話はたとえ話であって真理ではない。常識ではなかるうか。こんなことが二千年も続いているのである。イエスはなにも書かず死んだ以上事の顛末を説明する註解者を求めている。この註解者が「人の子」である。キリストと人の子は同じではなく「セット」なのである。キリストが人の子の到来を予言するのはおかしいことだと思わないのだろうか。

この手の質問に答えられる専門家に会ったことがない。

今回私は自分の長所も短所もすべて曝け出して書いている。文才がないことや独りよがりの短所はみてのとおりである。ネットのよさは不特定多数の人が観ていることにある。むろん犯罪の要素も孕んでいるがすべての人が犯罪者というわけではない。このサイトを覗く方は限られていようが外国人のような反応を示す方も居るかもしれない。電子書籍や？ Padという新たな通信手段も台頭してきている。どう転ぶか分からないが喜ばしい兆候である。

『相棒』や『ゴルゴ13』は優秀なスタッフが丸となって「内容」のあるものを追求している。このふたつのシリーズには「逃げない」清さがある。私は「イエス」をこの方法で仕上げて海外に真価を問いたいのである。本稿はほんのさわりに過ぎない。ネットで大著を書くことは愚かなことである。とりあえず読解の問題点に要点を絞って初歩的な考察を行ったつもりである。イタリア語やフランス語などの外国語に訳せばこれだけでも日本より反響も呼ぶ自信がある。国教に関わる大事な問題である以上大人の対応を示すにちがいない。本の氷河期の時代が続いている。海外に目を向けないことが共食いの現象を起こしている原因ではなかるうか。

イエスは「狭き門から入れ」と教えている。この試みは狭き門である。独りで潜れないのであれば協力者を募るしか道がない。イングウェイやダリはアメリカへ渡って成功した。ジミ・ヘンはイギリスへ渡って成功し、空海は中国へ渡って成功している。時の流れは一律ではない。このことは一般相対性理論が証明している。そして運も一律でなく撒かれている。成功するにはその条件を整えなければならぬ。独力で切り開けるほどこの主題は甘くないのである。

私はヨーロッパに宿命を感じている。私は日本では変人の部類に入

るらしいが欧米でもそうとは限らない。かれらは人の話を真剣に聞くという美德をもっている。私も真剣に話しているつもりである。本来日本人には関係のない主題なのだから必要とする国で説くのが道理である。そう簡単に協力者は現れないだろうが別に気にしない。賢い者は必ず居るからである。以上が仮面を取った私の告白である。

因みに「宮沢さん一家の事件」と「吉田有希ちゃんの事件」のことは今後も思索を続けるつもりでいる。わずか八才の少女が包丁でメッタ刺しにされたのである。子供がこのような酷い目に遭う事件は世界の犯罪史でも例がないのではなかるうか。有希ちゃんの事件も同様である。八才の少女の胸には生前に受けた複数の鋭利な刃物の刺し傷が刻まれていた。そして遺体は家畜のように血抜きをされた上に全裸にされて山に棄てられていたのである。子供は国の宝である。許せるはずがない。現状は絶望的だが諦めたら終わりである。

今後はこの両事件だけでなくエッセー的なことも書くつもりでいる。

以上が本稿のエピローグである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6509/>

Yeshua（Jesus・Christについて）

2010年10月9日18時47分発行